紛争とムスリム女性
MNLFと政府軍の武力対立に関する一考察

Armed Conflict and Muslim Women :
The stories of Sangil women during the conflict between MNLF and AFP

石井　正子*
ISHII Masako

キーワード：フィリピン，モロ民族解放戦線，紛争，ムスリム，女性
KEY WORDS : the Philippines, MNLF, armed conflict, Muslim, women

In the late 1960s, the armed conflict between the MNLF and the Armed Forces of the Philippines (AFP) dramatically escalated. The AFP had indiscriminately bombarded, arrested, tortured, and murdered Muslim residents fighting against the guerilla strategies of the MNLF. Their families were mercilessly killed, and were forced to leave their villages and become refugees.

Despite the destructive impact it had on the daily lives of the people, studies of the armed conflict have mainly focused on the ethnic resurgence of the Muslim Filipinos. There are insightful explanations concerning the problems of leadership or the ideological aspects of the separatist movement. However, examination of the destructive nature of the conflict in regard to the local people has been lacking. There has been little reflection incorporating the subjective experiences of the victims.

Therefore, this paper reveals the perspective of the people who experienced destruction and reconstruction of their daily lives during the armed conflicts by interviewing 28 Muslim women in the South Cotabato region. Their stories were collected from March 1995 to March 1996.

For most Muslim women in the region, the armed separatist movement did not only symbolize the quest for independence or autonomous government. Nor was it solely to protect the homeland or Islam. Their main focus was to protect their children and to survive. In the process of finding the means for survival, they changed some of their social values in order to adapt to the new environment. Thus, this paper tries to integrate the stories and experiences of the Muslim women into a discussion of conflict and social change.

＊国立民族学博物館中核的研究機関研究員 COE Research Fellow, NME

はじめに*

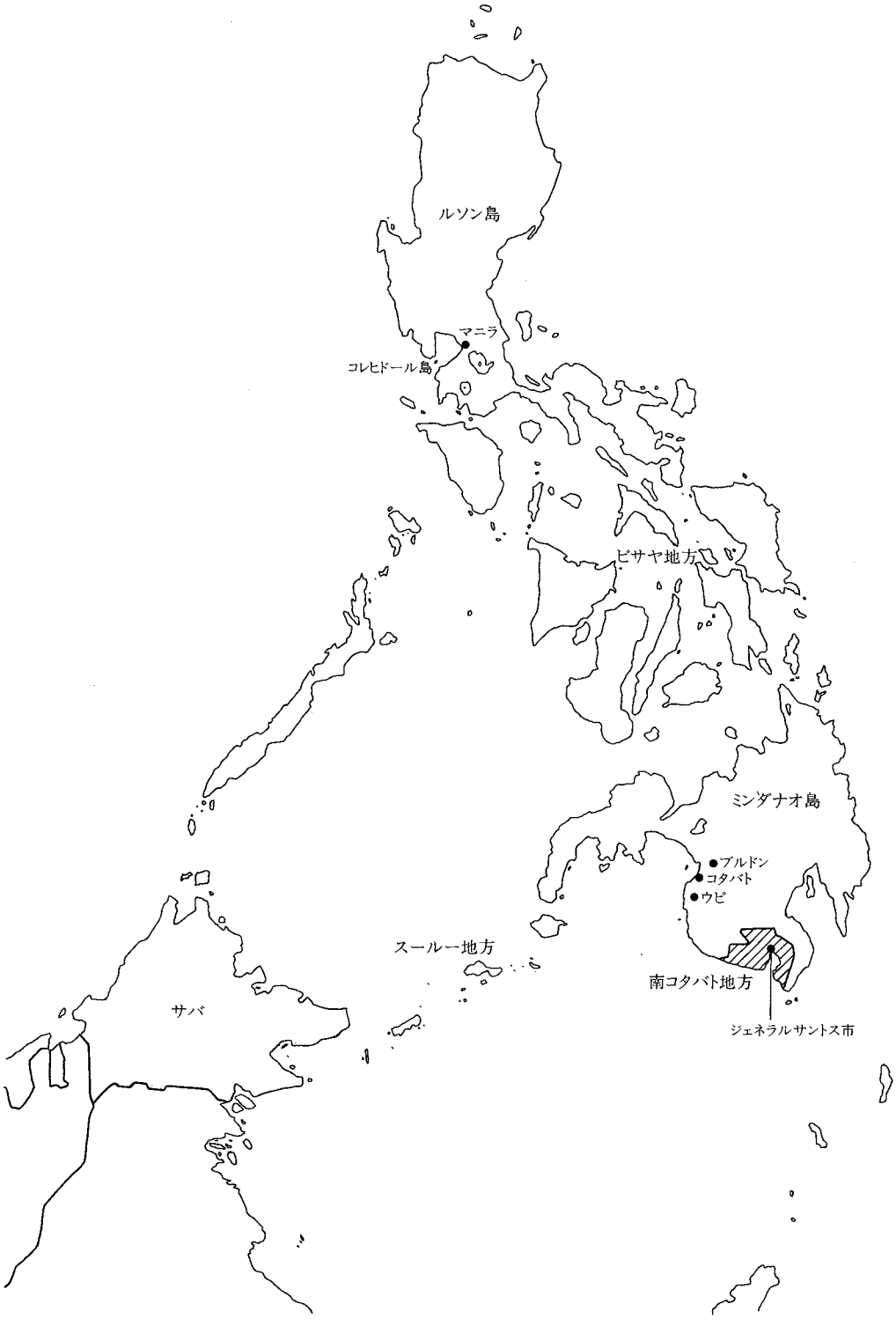
1960年代後半，フィリピンのミンダナオ島，スール一地方一帯では，モロ民族解放戦線（Moro National Liberation Front, 以下 MNLF）を中心に，中央政府に対してムスリムの主権（後に自治権）を要求する武力闘争が展開された。ムスリムは，人口の約6～8パーセントであり，約90パーセントのクリスチャンに対して少数派である*1。1996年9月，MNLF がイスラム諸国会議機構（Organization of Islamic Conference）の仲裁を受け入れて，フィリピン政府と和平に合意するまでの約25年間，とくに1960年代末から80年代にかけて，これらの地域の行政・治安システムは麻痺し，MNLF とフィリピン政府軍との間の戦闘だけでなく，いわゆる「自警団」などの活動も含めて，地域住民，とりわけムスリム系住民に対する殺戮，暴行，拉致，略奪，放火などが繰り返された。こうした紛争状況のもとで，約5万人ともいわれる住民が犠牲になっただけでなく［*Far Eastern Economic Review*, Sep. 5, 1996 : 24］，多くの住民が生計の手段を失い，住み慣れた土地からの避難を余儀なくされた。少数宗教集団であるムスリム系住民の日常は根底から覆され，紛争の経験は数多くのムスリム系住民に後戻りすることのできない痕跡を刻みつけたのだった。本稿は，紛争にさまざまな形で遭遇したムスリム系住民の女性たちの経験をインタビューを通して分析し，人々にとって MNLF の武力闘争がもたらした紛争とは何であったか，紛争は人々に自己と社会についてどのような認識の変化をもたらしたか，そして人々はどのようにして生活を再建していったかを，考察しようとするものである。

周知のように MNLF の活動についてはすでにかなりの研究が蓄積されている。MNLF を中心とする分離運動が活発になった1970年代は，経済が発展すれば民族問題は自然に解決されるという楽観論に反して，世界各地で民族間の軋轢に端を発した紛争が噴出しはじめた時期でもあった。こうした時代的状況に対応する形で，フィリピンにおけるムスリム分離運動に関しても，フィリピンの国民統合を問い直す研究が蓄積された。それらの多くは，エスニシティという観点からフィリピン国家と宗教的マイノリティの問題を取り上げたり［藤原 1984 ; 山影 1988 ; Bauzon 1991］，国民統合の政策を再評価したものであった［Gowing & McAmis 1974 ; Gowing 1979 ; Majul 1985 ; 川島 1989-90］。また，分離運動自体を対象とし，その組織形態や紛争の展開を時系列的に追う研究や論文も多く発表された［George 1980 ; Noble 1976 ;

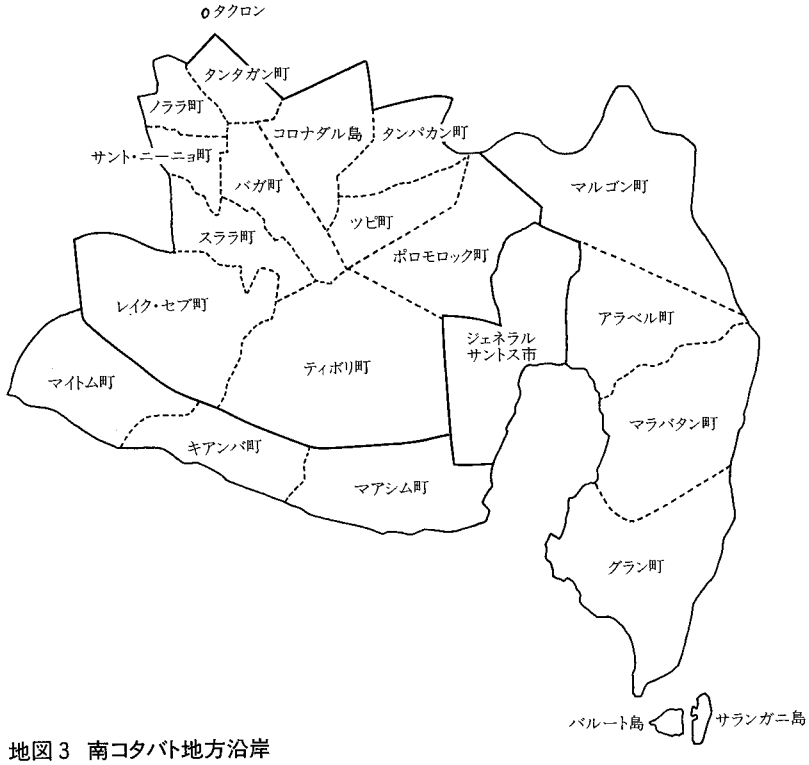
＊本稿は，東南アジア史学会関西例会（1998年1月24日）に発表したものをまとめたものである。例会参加者には懇切丁寧な助言と示唆をしていただいた。また，筆者に紛争の経験を共有してくださった南コタバト地方のサンギル女性の方々には大変お世話になった。ここに記して謝意を表したい。

＊1　フィリピン・ムスリムはバジャオ（Badjao），イラヌン（Ilanum/Iranon），ハマ・マプン（Jama Mapun），カラガン（Kalagan/Caragan），カリブガン（Kalibugan），マギンダナオ（Maguindanao），マラナオ（Maranao），モルボグ（Molbog），パラワニ（Palawani），サマル（Samal），サンギル（Sangil），タウスグ（Tausug/Tausog），ヤカン（Yakan）の13民族集団から構成される。

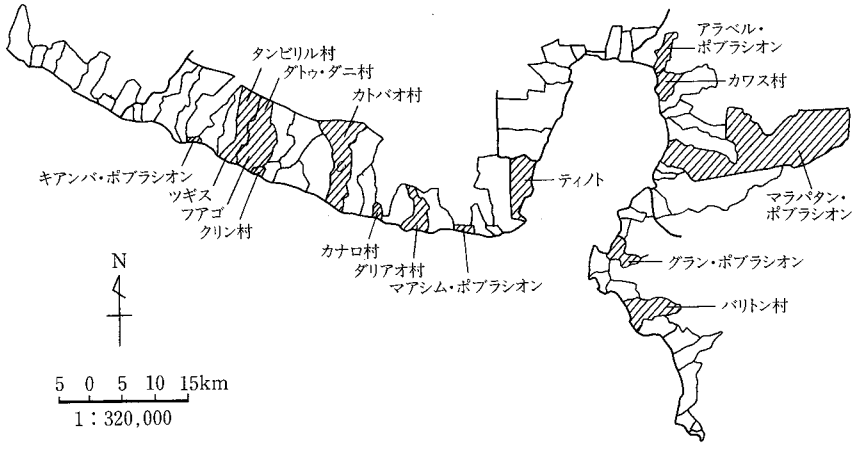
地図１　フィリピン全図


ルソン島
マニラ
コレヒドール島
ビサヤ地方
ミンダナオ島
ブルドン
コタバト
ウピ
スールー地方
南コタバト地方
ジェネラルサントス市
サバ

地図2　南コタバト地方



地図3　南コタバト地方沿岸



Mercado 1984 ; Madale 1984 ; Tan 1977]。しかし国民統合に着目した多くの研究では，運動の過程やイデオロギー的側面に分析の中心があり，紛争状況自体やそのなかの住民に焦点をあてたものは比較的少ない。換言すれば従来の研究の中心は，運動の担い手たちに焦点があてられ，運動の周辺，あるいは運動によってもたらされた状況のもとで受け身の変容を迫られた人々の問題は看過される傾向があった。紛争状況そのものがミンダナオ島やスールー地方での現地調査を困難にしてきたという事情も，こうした関心の偏りの背景として指摘できよう。

本稿は，上記のような研究状況のなかで，MNLF の活動からみれば周辺に位置した住民の視点からこの紛争を捉え直そうとするものである。紛争の激戦地帯はコタバト州，マギンダナオ州，スルタン・クダラート州，スールー地方であり，調査対象である南コタバト地方*2は，MNLF の活動という観点からみれば周辺部に位置していた。南コタバト地方では，多くムスリム系住民が当初から政府軍対 MNLF という二項対立に組み込まれていたのではなく，紛争が広がる過程で徐々に MNLF 側に色分けされた。政府軍は MNLF のゲリラ戦術に対処するために，一般ムスリム系住民を MNLF の潜在的支持者であるとみなし，無差別に暴力を行使したのである。このように南コタバト地方では，大多数のムスリム系住民は運動の担い手というよりは，紛争によって突然日常生活を破壊された犠牲者であった。

また，MNLF の中心メンバーの出自はタウスグ，サマル，マギンダナオ，マラナオの民族集団であり，相対的に男性のほうが女性より多くメンバーに徴集されていった。インタビューの対象となったサンギルの女性は，民族的にも性別的にも MNLF の中心勢力から遠い存在にあった。ここではサンギルの女性に視点を据えることによって，ジェンダー論を展開するのではなく，一般住民が紛争に否応無く巻き込まれていく局面に焦点を当てることを目的とする。少なくとも調査対象となった女性にとって紛争とは，「モロのホームランド（Bangsa Moro Homeland)」を守り，イスラム教を擁護するための戦いを意味しただけではなかった。むしろ，紛争の犠牲者となった彼女たちにとって重要だったのは，子どもを守り，生きのびていくために新たな活路を模索することであった。自らの意志とは無関係に勃発し，拡大していった紛争に日常性を破壊され，そこから生活を再建していく彼女たちの姿には，分離運動の担い手とは異なるもう一つの戦いが映し出されるのである。

同時に紛争は，サンギルの女性が解放戦線のイデオロギーに触れ，国家，国際関係レベルの政治構造と自らの社会がいかに関連しているかを認識させる機会をつくった。紛争は日常性を破壊したという意味でサンギルの女性に変化を強いる要因となり，同時に新しい価値観をもたらす機会を内包し

＊2　南コタバト州は，1992年にサランガニ州と南コタバト州に行政単位が分かれた。本稿では南コタバト州，サランガニ州，ジェネラルサントス市の3つの行政単位を合わせて南コタバト地方と呼ぶことにする。

ていたといえよう。紛争のなかで日常生活を再構築する過程において，サンギルの女性は新しい価値観を選択的に受容していった。紛争が一般住民に与える影響を考察する従来の研究関心では日常生活の中断の側面が強調されてきたが，本稿では生活を再建する過程で社会変容が促進される側面があることを指摘したい。

本稿は，このような問題意識にもとづく研究の第一歩として，サンギルの女性の紛争における経験をインタビューのなかから再構築することを試みる。紛争をインタビューによって再検討しようとするのは，紛争における状況判断や経験などは，数量的なデータより，インテンシブな聞き取り調査によってよりよく理解することができると考えるからである。紛争は突然日常性を破壊し，人生の中の画期的な経験を形成する。突発的で衝撃度が大きいだけに，同じ紛争状況におかれている女性でも，被害の度合いは偶然性に左右される。そして，新たな生計の手段を見出す方法にも個人差が生まれる。つまり紛争は，比較的同じような社会経験を積んできた女性たちの間に差異をもたらし，紛争後の女性の役割に多様な方向性を開くことになった。このような個人差もまた数量的なデータには反映されにくく，インテンシブな聞き取り調査によって収集した語りのなかによりよく表現されると考える。

紛争の経験に関するインタビューは，1995年3月から1996年3月までジェネラルサントス市を拠点に南コタバト地方で女性28名に対して行った。このうち，一回のインタビューが1～2時間におよび，内容を確認するために複数回インタビューを行うことができたのは，21名に対してであった。紛争に関する聞き取り調査は困難であったため，再度確認ができなかった不確実なデータをも検討の対象とすることにした。また，男性7名にもインタビューをして紛争の状況を把握した*3。

現地調査を行った期間は，和平が合意される以前であり，紛争に関する聞き取りは，大変困難であった。サンギルの女性にとってMNLFとの関係を話すことは，すなわち政府に対する反逆者との関わりを告白することを意味し，身の安全が保証されなかったためである。本稿では，紛争の経験を語った女性の名前を順にA.A., B.B.……とする*4。

本稿では，まず第I節で分離運動が展開した背景を南コタバト地方の政治，社会構造の文脈において概観する。次に第II節では，武力紛争が南コタバト地方に拡大していく様子を描写する。南コタバト地方における武力衝突は，偶発的事件を契機に組織的対立に拡大し，泥沼化していった。

＊3　インタビューは筆者が直接南コタバト地方で広範に話されているセブアノ語で行ったり，通訳の協力を得て，セブアノ語を介してサンギル語やマギンダナオ語で行った。

＊4　インタビューがキアンバ町タンビリル村ツギス（Tugis, Barangay Tambilil, Municipality of Kiamba）出身者に偏ったのは，筆者がジェネラルサントス市で滞在した家族がツギス出身であり，その親族関係を通じてインフォーマントを紹介してもらったためである。インフォーマントのなかには婚姻によりツギス以外に居住するサンギルや，出自は異なるがツギスに住んでいるサンギル以外のムスリムも含まれる。ただし，本稿に引用したインフォーマントはいずれもサンギルにアイデンティティーを見出していた人たちである。また，サンギル以外のムスリム数名にもインタビューをして紛争状況の把握に努めた。

MNLF と政府軍の衝突は，ゲリラ戦の形態をとったために，住民は日常生活において暴力と隣り合わせになった。第III節では，インタビューの結果を用いて，さまざまな局面で紛争に遭遇した女性の経験を記述し，破壊された状態から彼女たちがどのように生活を再建していったかを描写する。つづく第IV節では，調査対象となった女性が紛争以前のサンギル社会，特にそのなかでの女性のあり方をどのように語り始めたか説明し，紛争が契機となった社会変容の過程に彼女たちの経験を通して迫りたい。

I．背景――南コタバト地方の社会的状況とムスリム分離運動

1960年代のフィリピン・ムスリム社会には，新しい指導者が台頭する様々な条件が揃い始めていた。若手知識人がもともとスペイン植民地政府が南部フィリピンのムスリムにつけた「モロ」という蔑称を，果敢に戦い，植民地勢力に屈しなかった民族の誇称にかえていく動きを起こしていた*5。MNLF の議長となるミスワリ（Nur Misuari）のように大学に進学し，高等教育を受ける機会を得た若手知識人が増えていたのである。1950年代よりフィリピン・ムスリムの青年がエジプトを中心とする中東の教育機関に留学し始めていた。中東から帰国した若いウラマー*6は，フィリピンにおけるイスラームのあり方や政治体制に対して批判的になり，反政府意識を強めていた［川島 1996］。その中にはミスワリと共に初期の MNLF 指導者となったサラマト（Hashim Salamat）も含まれていた*7。一方，一部の貴族層（ダトゥ層）*8出身の指導者は，1950年代に南部で全面的に公選制が導入されると，人口比率をのばすクリスチャンに政治的基盤を揺るがされ不満を高めていた［川島 1992］*9。こうした動きが一時的に統合され，1960年代後半にフィリピン・ムスリムは分離運動を展開する*10。

MNLF は「モロ」の名のもとに，一民族としてのフィリピン・ムスリムの団結を唱えていた。だが既に指摘されているように，実態は分離運動の指導者層の傘下に各民族集団が独自性を保ったまま参加した組織であった。MNLF 議長のミスワリはタ

＊5　16世紀，マニラに拠点をおいたスペイン政府は，ミンダナオ島を攻略しようとした。その際，なかなか降伏しない南部ムスリム系住民が，十字軍の敵である北アフリカのムーア人（Moor）と同じ信仰をもつことから，彼らを軽蔑と敵意をこめて「モロ」と総称した。キリスト教布教を盾に戦争を正当化したスペイン軍に対してムスリムは抵抗を繰り返した。そのため，実質的にスペインはムスリムを支配下におくことには成功しなかった。

＊6　イスラム教の宗教的知識に優れた学者・宗教的指導者層。

＊7　サラマトはエジプトの首都カイロにあるアズハル学院への留学経験をもつ。

＊8　イスラム教が伝来して形成されたスルー王国やマギンダナオ王国に代表される複数のスルタネイトでは，スルタンの下にダトゥ・システムと呼ばれる伝統的階層制が存在していた。ダトゥ・システムはダトゥ（貴族層），サコペ（普通民），奴隷（bisayas または olipon）の三つの身分によって構成されていた。

＊9　アメリカ植民地政府は，非クリスチャンが多数居住する州を行政府の直接の監督下に置き，国会議員や州知事を任命制によって選出した。これに対してコモンウェルス（独立準備政府，1935年発足）期から1950年代にかけて南部において国政レベル，地方レベルの公選制が実現されていった。1950年代末にはフィリピンの他の地域との政治制度上の差別が撤廃されたという［川島 1992］。

＊10　一方，貴族層出身の指導者や若手ウラマーのなかには，分離独立を目指すのではなく，文化多元主義を標榜して，フィリピン国家内でムスリムの権利拡大を主張する非分離派の立場をとるものもいた［川島 1989-90；1996］。

ウスグが過半数を占めるスルー出身である*11。アロント（Abul Kayer Alonto：ミスワリ，サラマトと共にMNLF初期の指導者）とサラマトはそれぞれマラナオとマギンダナオの有力政治家の一族である*12。アメリカ体制期以来，上院，下院の議員，憲政議会の代表に選出されたムスリムはほとんどがマラナオ，マギンダナオ，タウスグの有力政治家であったことを鑑みると，MNLFの指導者層はフィリピン・ムスリムの有力民族集団で占められているといえる［川島 1989-90：50-58］。

これに対して，指導者層以外の住民や南コタバト地方のサンギルのようなコミュニティでは，クリスチャンの入植により，ミンダナオ島の宗教別人口比率が逆転し，ムスリムがマイノリティになっていった過程においてクリスチャンに対する不満が蓄積されていった。アメリカ体制期にはミンダナオ島にルソン島やビサヤ地方の土地なし貧民を移民として送り出す政策が打ち出された。移民の大半はクリスチャンであった。北部ではミンダナオ島は未開地があり，天然資源が豊富な「約束の地：Land of Promise」であるというイメージが先行し，開拓されるべきフロンティアであると呼ばれた。一方ムスリムは，クリスチャン入植の歴史は土地を喪失する歴史であると解釈していくのである［Rodil 1987；Ahmed 1987-88；Fianza 1994a, 1994b］。

まずアメリカ植民地政府は1913年から1917年の間にミンダナオ島に7つの農業入植地を設立した。そのうち6つが旧コタバト州（現在のコタバト州，南コタバト地方，マギンダナオ州，スルタン・クダラート州）に設立されている*13。当初入植は進まず，これらの入植地は1928年までに4000人のクリスチャン入植民を誘致するにすぎなかった［Pelzer 1948：127-132］。しかし，その後も1918年に労働局国内移民局（Interland Migration Division of the Bureau of Labor：1918-39），1939年に土地入植庁（National Land Resettlement Administration：1939-50）が設立され，移民入植が促進されていった［Wernstedt & Simkins 1965］。また，会社の土地所有を制限する公有地法にもかかわらず，1926年にはミンダナオ島においてデル・モンテをはじめ，数社のプランテーションが開園した。

1938年11月，サントス参謀総長（Major General Paulino Santos, First Filipino Chief of Staff of the Philippine Army：1934年5月4日就任，1938年12月31日退任）はケソン大統領の命令により，農業，林業，畜産，土壌，灌漑の専門家などを連れてダジャンガス（現在のジェネラルサントス市の中心部）に到着し，開拓地の視察を行った［Pelzer 1948 141-142］。翌年2月，彼は土地入植庁の植民計画の下にクリスチャンの入植民を率いてダジャンガスに

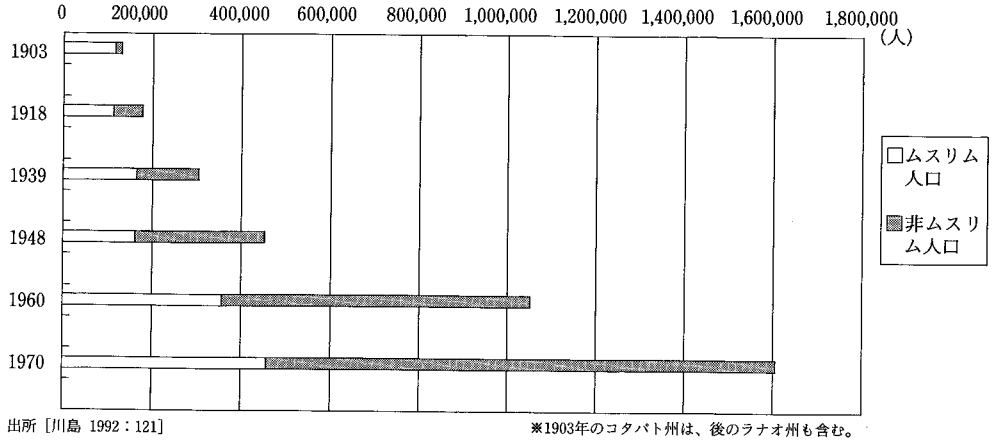
---

*11 ミスワリの母親はサマル，父親はタウスグである。

*12 アロントはMNLF初期の副議長であった。彼は南ラナオ州元知事の息子で上院議員の甥であった。後年副議長となったサラマトはコタバト州の元国会議員の一族である［George 1980：227-228］。

*13 1966年に南コタバト州がコタバト州から分かれた。1973年にコタバト州はさらに北コタバト州，スルタン・クダラート州，マギンダナオ州に分割された。1984年に北コタバト州は再びコタバト州に改名されている。

表1　旧コタバト州におけるムスリム人口の変化



出所［川島 1992：121］　※1903年のコタバト州は、後のラナオ州も含む。

入港し，自らコタバトの開拓を指揮した。同地方では道路，橋の建設やマラリア対策が進んだ。インフラストラクチャーが整備し始めると，制度的に送り込まれる移民に加えて自費で入植する人も増えた。その結果，同地方では急速な勢いでムスリムの人口比率が減っていった（表1参照）。南コタバト地方の中心都市ジェネラルサントス市は，同地方のクリスチャンの間で英雄視されているサントス元参謀総長の名にちなんでつけられたものだ。

ミンダナオ島に中北部のクリスチャンの入植を促し，開発を推進する政策は独立後にも継続して採択された*14。ミンダナオ島は次第に外資に依存した一次産業中心の経済を発展させていき，世界資本主義システムの周辺に編入されていく［Enloe 1980；Tadem *et al.* 1984；Turner *et al.* 1992］。南コタバト地方ではフィリピン独立後，内陸部のアラー平原とコロナダル平原の肥沃な土壌を活かした農業が発展した。1963年から1967年の間にドール社などの大規模な農業関連会社が操業を開始して以来，トウモロコシ，パイナップル，ココナッツなどのアグロインダストリー部門が飛躍的に拡大した。1989年においては，南コタバト地方はフィリピン全国のトウモロコシの23パーセント，パイナップルの40パーセント，ココナッツの8パーセントを生産している。1980年代より沿岸部では商業漁業が活発になり，ジェネラルサントス市は日本の刺身市場向けにマグロを輸出するなど，漁獲を国内外向けに流通させる漁業産業都市に発展した。

しかし，低賃金によって労働力を確保するミンダナオ島の産業開発が進み，住民が資本主義経済の底辺に組み込まれていくと，特にムスリム下層民は，土地を奪われていくという喪失感を強め，次のようなマイノリティとしての認識を形成していくことに

＊14　1950年に土地入植開発公社（The Land Settlement and Development Corporation）が，1954年に国家入植復興庁（The National Resettlement and Rehabilitation Administration）が設立された。ミンダナオ島への入植移民に関してはWernstedt & Simkins［1965］を参照。

なる。

アポ・ディランの話（仮名。60歳前後：1995年現在。キアンバ町ダトゥ・ダニ村フアゴ（Fuago）のモスクで礼拝を行い，説教を行う宗教的指導者。）

キアンバ町に最初のクリスチャンの移民がやってきたのは1919年でした*15。まず，アメリカ人のルード氏（Rudes）とリスラン氏（Henry Greisland）がやってきました*16。ルード氏はクリン（Kling）に，リスラン氏はツギスにそれぞれ大きなココナッツ・プランテーションを開きました。そしてこれらのプランテーションの小作人としてイロカノ（Ilocano），イロンゴ（Ilongo），パンガシナン（Pangasinan）などが次々にやってきました*17。当初クリスチャンはとても親切で，私たちとクリスチャンはお互いをいたわり合って生活していました。近所のイロカノは私たちの母親，父親のことをイナ（お母さん），アマ（お父さん）と呼び，いずれはルソン島に帰るから，お米，タバコ，砂糖と交換に少し土地を貸してくれるように頼みました。しかし，その後はムスリムがイグノランテ（文字が読めない人，教育を受けていない人）*18であることを利用して土地の所有権を手に入れてしまい，私たちサンギルは自分の土地の小作になりさがってしまっています。

当時はマギンダナオのスルタンから派遣されたダトゥ・ダニ（Datu-Dani）がこの辺りを支配していました。クリスチャンの移民はダトゥ・ダニと話をして，“Sige sige Datu, sige sige Datu”（よろしくお願いしますよ，ダトゥ）といってダトゥの土地を耕作しだしました。“Sige sige Datu”の後，その土地はプランテーションに変わっていきました。

次々にさらに多くクリスチャンがルソン島からやって来ました。すると，

「やあ，初めましてこんにちは。私はルソンからきました。」

「はあ，そうですか，私はキアンバからです。」

という具合に次第に友人関係になっていきました。

「ところであなたは土地をもっていますか。」

「はい。もっています。そこです。」

友人関係になった後はサンギルは“No read, no write”（読むことも書くこともできない）でクリスチャンは“educated”（教育を受けている）というたったこれだけの違いでクリスチャンは土地の登録を済ませ，その土地の所有者になりました。

そして彼らは，

「この土地は私のものである。証拠？証拠ならゴビエルノ（gobyerno：政府）に行ったらいい。」

---

*15 Cotabato 1952 Guidebook には1920年にキアンバ町に移民が入植したと書かれているが［Millan 177-190］，Apo は1919年だと言っていた。

*16 リスランは元アメリカ軍人かつ学校の先生であった［Millan：31］。

*17 イロカノ，パンガシナンはルソン島の民族集団，イロンゴはビサヤ地方の民族集団。

*18 イグノランテはもともとスペイン語である。セブアノ語ではイグノランテ（ignorante），サンギル語ではイノランテ（inorante）という。

表2　南コタバト地方・言語集団（Mother Tongue）別人口

	Total	Maguin-danao	Samal	Tausog	Sangil	Maranao	Cebuano	Panay-Hiligaynon	Samar-Leyte	Tagalog	Ilocano	B'laan	T'boli	Manobo
		ムスリム諸語					ビサヤ諸語					山地民		
1948 Cotabato	439,700	n.a.	n.a.	n.a.	n.a.	n.a.	48,000	47,600	1,400	8,700	30,100	n.a.	n.a.	n.a.
(%)	100	–	–	–	–	–	10.9	10.8	0.3	2.0	6.8	–	–	–
1960 Cotabato	1,029,100	312,200	2,200	1,100	600	6,400	151,800	222,900	6,000	22,200	98,000	78,800	8,400	11,312
(%)	100	30.3	0.2	0.1	(a)[1]	–	14.7	21.7	0.6	2.2	9.5	7.7	0.8	1.1
1970[2] S.Cotabato	466,100	22,700	n.a.	355	1,300	1,300	122,600	187,300	11,000	14,500	39,400	29,200	13,100	900
(%)	100	4.9	–	0.1	0.3	0.3	26.3	40.2	2.4	3.1	8.5	6.3	2.8	0.2
1975[3] S.Cotabato	586,900	22,200	n.a.	700	1,000	n.a.	157,500	229,100	5,600	16,600	45,100	40,900	32,000	n.a.
(%)	100	3.8	–	0.1	0.2	–	26.8	39.0	9.5	2.8	7.7	7.0	5.5	–
1990*** S.Cotabato	1,071,100	38,200	1,100	1,900	2,400	5,000	383,100	374,800	5,900	29,100	53,800	64,000	50,300	1,900
(%)	100	3.6	0.1	0.2	0.2	0.5	35.8	35.0	0.6	2.7	5.0	6.0	5.0	0.2

出所：1. Republic of the Philippines Department of Commerce and Industry, Bureau of the Census and Statistics, *Vol. III Summary and General Report on the 1948 of Population and Agriculture Part I-Population.*
2. National Census and Statistics Office, *South Cotabato 1970 Census of Population and Housing.*
3. National Census of Statistics Office, *1975 Integrated Census of the Population and its Economic Activities Population South Cotabato.*
4. National Statistic Office, *1990 Census of Population and Housing South Cotabato.*

1. (a) は0.1パーセント以下を示す。
2. 1966年に南コタバト州は旧コタバト州から分かれて設立された。
3. 1990年のセンサスは世帯別人口数による統計である（その他1948，1960，1970，1975年のセンサスは人口別）。
人口数は百人未満四捨五入。
人口比率(%)は0.1パーセント以下四捨五入。
1980年のセンサスの言語集団別の統計は，世帯数のみが記載されているので，表に記載しなかった。

といいだしました。ゴビエルノとはクリスチャン入植に伴って造られた町役場のことです。

現在になるとそのゴビエルノからアセスメントがやってきて土地を調べにきます。そしてサンギルは“スクワッター（不法占拠者）”だという。“Despues, patay na!!”（そしたらもうおしまいだ）元々の土地はサンギルのものなのに一体誰が“スクワッター”なのだ！

下院議員であるチョンビアン氏（James Chiongbian）がクリンに持っているクリン・プランテーションは彼の先代がルード氏から購入したプランテーションです。現在はココナッツ・プランテーションの他にエビの養殖場が開かれています。この土地をルード氏が耕作し始めた時，平和を好むサンギルは彼らが持ち歩いていた銃を見て恐れて，自ら土地を出ていった人もいました。ただ私の妻の祖父だけは頑固にも土地から離れず，その孫は今でもクリン・プランテーションの中に住んでいます。プランテーションの中には今でもサンギルのお墓が残っているのです。

アポ・ディランは毎週金曜日にフアゴのモスクで礼拝と説教を行っている。フアゴやツギスでは家族関係，隣人関係のもつれなど，もめごとを解決する役割を担う人物である。アポ・ディランがキアンバ町のサンギル・コミュニティのオピニオン・リーダーであること，またクリスチャンに土地を取られた話が，それを直接的に経験して

いない世代にも広く共有されていることから，上述のアポ・ディランの話は，サンギルが置かれてきた社会状況の変化に関する一般的なオーラル・ヒストリーになっているといえよう。そこには先住民としての土地に対する正統性を主張し，クリスチャン入植移民によって政治経済的に周辺化したことを訴える次のようなマイノリティの認識を読みとることができる。

まず第一に，サンギルは自らを南コタバト地方の先住民に分類し，クリスチャンはよそ者であるとする。南コタバト地方の民族構成は表2の通りであり，同地方の先住民はビラアン（B'laan），ティボリ（T'boli），マノボ（Manobo）などの山地民とサンギルなどの13～14世紀にイスラム教がフィリピン南部に伝来した後にイスラム化した民族集団である。しかし，ツギスには南コタバト地方にイスラム教を最初に伝えたとサンギルが自負する布教者の墓が残っており，サンギルは自分たちこそが南コタバト地方における最初のムスリムであったことの証明であると主張する。それゆえに，サンギルはクリスチャンに対して自らのルーツの正統性を主張している。だがその正統性を無視して，クリスチャンはサンギルが文字を読み書きできないイグノランテであることを利用して土地登記を済ませ，土地を手に入れていったとする。サンギルはクリスチャンによって土地を奪われた善良な犠牲者であると位置づけ，従って土地を回復する権利があると主張するのである［Rodil 1987；Fianza 1994a；1994b］*19。

第二に，サンギルはクリスチャンの入植に伴って貨幣経済が浸透したと認識している。それ以前は，ティボリやビラアンなどの山地民との交換経済が主体であった。クリスチャンは入植すると換金作物を導入し，商店を開き，学校を建てた。一方貨幣経済の概念をもたなかったサンギルは貧乏になっていった。実際には，クリスチャン移民もルソン島，ビサヤ地方の貧民であり，ムスリムと同じように資本主義経済の底辺に組み込まれた労働者であった。しかし，クリスチャンの数が圧倒的に多くなっていく過程で，ムスリムは喪失感，疎外感を大きくしていく。

このように住民意識のレベルにおいて，ムスリムとクリスチャンの下層民は，不平等感，疎外感，貧困による社会不安を大きくしていた。資本主義経済が浸透していく過程においてサンギルが周辺化されていく憤懣の矛先がクリスチャンに向かい，分離運動を支持していった基盤になっていったと考えられる。「バンサ・モロ・ホームランド」を設立することがジハード（イスラム世界の拡大，または防衛のための聖戦）であるとともに，貧困に対して救済をもたらすというユートピア的期待が住民の支持を闘争に集めていったといえよう。

---

*19　これに対して，クリスチャンは一般的にムスリムとの間に土地問題はなかったと主張する。例えば，1956年～59年までキアンバ町長をつとめた Cornelio T. Fulgui 氏（68歳，1997年調査当時）によると，ムスリムとの関係はマルコスが1972年に戒厳令を布告するまで友好的で平和であったという。ムスリムは土地を売りはしたが，土地をいくらでももっていたので，土地問題はなかったという（1997年9月30日，筆者によるインタビュー）。

表3　南コタバト地方における紛争の広がり

	全体の流れ	南コタバト地方
1967	・地方選挙。	
1968.3-4	・ジャビダー事件。 ・ジャビダー事件に対してマラカニアン宮殿の前で当時フィリピン大学の講師であったミスワリを含むムスリムが抗議デモを行う。	
1968.5	・コタバト州元知事のダトゥ・マタラムがミンダナオ独立運動（Mindanao Independence Movement）の開始を宣言。コタバト市内のキリスト教徒の間に不安が広がり，市内で殺傷事件が起きる。	・1960年代後半：コタバト州で始まった反ムスリム集団イラガの軍事的攻撃が南コタバト地方にも広がる。ツギスでは，自警団モロ・ファイターズ（Moro Fighters）が組織された。
1969	・大統領選挙。	
1969-70	・マレーシアのサバでトップ・ナインティー（Top 90）[1] の訓練。	
1970.3	・コタバト州ウピ町でイラガによって6名のムスリムが殺害される。 ・反ムスリム集団イラガの活動が活発になる。これに対して，有力ムスリム・ダトゥがブラックシャーツ，バラクーダという自警団を組織し，緊張感が高まる。	
1970.11	・憲法制定会議議員選挙。	
1971	・マレーシア，サバでトップ・スリーハンドレッド（Top 300）の訓練。	・後にMNLF南コタバト州革命委員会（Selatan Kutawato State Revolutionary Committee, Moro National Liberation Front）の議長となるオットー・サリムがTop 300の訓練に参加する。サリムは始めてリビア帰りのミスワリに会う。イラガの活動が拡大していたため，6ヶ月でサバより帰国。スルタンクダラート州，パリンバン町コロンコロン村に上陸し，戦略ミーティングを開く[3]。女性を看護婦として訓練し，負傷兵の手当てに動員することが話し合われた。マギンダナオの女性が第一群として組織された。 ・サンギル・コミュニティの指導者に一家から最低一人は訓練に参加することが呼びかけられた。 ・モロ・ファイターズがMNLFに吸収される。 ・マアシム町ダリアオ村に南コタバト州革命委員会の基地が設営される。
1971.6	・コタバト市近郊マニリ（Manili）でモスクに集められたムスリム約65人が虐殺された。	
1971.8	・コタバト州ブルドン町における戦闘。	
1971.11	・地方選挙。	
1972.9	・戒厳令が布告される。 ・MNLFが本格的に武力闘争を開始する。 ・MNLF，女性委員会（Women's Committee）を発足させる。 ・ホロ島で婦人補助部隊（the Women's Auxiliary Forces）が組織され，軍事訓練が行われた。	
1975		・マアシム町ダリアオ村において，第二群の女性が看護訓練を受ける。
1976.12	・トリポリ協定[2]。自治をめぐる解釈の違いにより，MNLFは後にトリポリ協定を否定。再び武力闘争へ。	・マアシム町で，結婚式中にハッジの娘が軍人に連行される。
1977		・マアシム町で，キアンバ町長の妻が殺される。 ・キアンバ町で，盲目の男性が軍人に殺されたことをきっかけに，住民の間に不安が広がり避難する。 ・キアンバ町，マアシム町のムスリムの家が政府軍に焼かれる。 ・キアンバ町からダリアオ町に連行された4人の男性がキアンバ町ポブラシオンで殺害される。 ・キアンバ町からグラン町に避難した15人の男性が政府軍により連行され，14人銃殺される。
1978		・パルート島で政府軍とMNLFの軍事対立。 ・ジェネラルサントス市に避難民が集まり，市場の前にポーロック・イスラム（Purok Islam）が形成されはじめる。
1984	・ハシム・サラマトを中心とするグループがMNLFから分離してモロ・イスラム解放戦線（MILF）を結成する。	・キアンバが平和になったという噂が広がり，ジェネラルサントス市に避難していた住民が戻りはじめる。
1986	・2月政変によってアキノ政権誕生。	・南コタバト州革命委員会の基地がマアシム町ルマティル村に移転される。

1. ミスワリを含む若いムスリム約90人がマレーシアのサバで軍事訓練を受けた［Angeles 1996 : 113; George 1980 : 143-161.］。
2. フィリピン政府の主権の枠内で、南部13州における自治、27日以内の停戦、反乱軍の恩赦、治安軍の設立、暫定政府の設立に合意した。
3. 1995年11月8日、オットー・サリム氏へのインタビューによる情報。

II．南コタバト地方への紛争の広がり

1960年代後半より，クリスチャンとムスリムがそれぞれの宗教グループへのアイデンティティを覚醒する象徴的な事件が連続した。1968年3月，マニラ湾の入り口にあるコレヒドール島でフィリピン正規軍の訓練を受けていたムスリム（スールー諸島で募集した主にタウスグとサマル180人）が虐殺された事件（ジャビダー事件）が発覚した*20。また同年5月には，コタバト州元知事のダトゥ・ウドトグ・マタラム（Datu Udtog Matalam）がムスリム独立運動（Muslim Independence Movement, 以下MIM）を結成した*21。MIMはムスリム対クリスチャンの立場を公に示したために，両者の対立意識を明確にする波及効果があった。1971年の地方選では，北ラナオ州，コタバト州の選挙戦がムスリム政治家対クリスチャン政治家の様相をおび，両者の関係者数名が殺される選挙運動を経た結果，ムスリム政治家が落選した*22。そして1972年9月に当時のマルコス大統領が戒厳令を布告したころには，若手ムスリム指導者層はMNLFを組織し，分離運動を展開していった（表3参照）。

しかし，実際の武力衝突は，ムスリム対クリスチャンという宗教的対立とは別の次元で拡大し，泥沼化していった。MNLFが結成された1960年代後半は，フィリピン共産党（Communist Party of the Philippines, 1968年設立）の軍事組織，新人民軍（New People's Army, 1969年設立, 以下NPA）が結成された時期でもあった。NPAは都市下層民，農民を巻き込んでゲリラ戦術をとっていた。これに対して地方の有力者は私兵や自警団を結成し，フィリピン全土で無秩序かつ残虐な暴力が横行しはじめていた。

自警団の結成が奨励された背後には，アメリカの低強度戦争*23の戦略が実践され

---

*20 訓練に当たったのはフィリピン国防省の民事局であった。訓練兵の一部が除隊を申し出たところ，一斉射撃にあい，14名が死亡，17名が行方不明になった。訓練の目的についてはいくつかの推定説がある。1．血気にはやるムスリムのマレーシア領サバへの進攻を阻止するために組織された，2．サバ進攻のために組織された，3．サバの中国人ゲリラ組織が，スールーに武器を流しており，それと戦うために組織された，4．第二次世界大戦末期にフィリピン派遣軍総司令官であった山下奉文が埋めた財宝を発掘するための部隊だった［George 1980：122-128；鶴見 1986：81-82］。鶴見は，こうした推定はすべて当たっておらず，秘密訓練はベトナム戦地へ派遣する傭兵部隊を育成するために米軍もしくはCIAが行っていたと推測している［鶴見 1986：82］。

*21 Muslim Independence Movementは後にMindanao Independence Movementと改称される。

*22 ラナオは1959年に南北ラナオ州に分割された。住民の7割がクリスチャンである北ラナオ州では，クリスチャンの政治家の支配が続いていたが，1960年半ばにムスリムの政治家，アリ・ディマポロ（Ali Dimaporo）がクリスチャンの知事などを味方につけて下院議員になった。ところが1971年の知事選では，ディマポロはムスリムの副知事を知事候補にかつぎ，これまで協力してきたクリスチャンの知事に対抗した。コタバト州の知事選では，元軍人のカヘロ（Carlos Cajelo）がムスリムの現職知事を破った。コタバト州における大半の町長職にもクリスチャンの政治家が選出される結果となった［George 1980：170-177］。

*23 Low Intensity Conflict（LIC）の和訳。ラテンアメリカやアジアでは特にフィリピンにおいてゲリラ活動と反乱勢力を押さえ込むために考案された戦略。準軍事組織や狂信的な宗教グループを利用し，非白人が非白人に対して戦う代理戦争を仕掛けることが一つの特徴である。つまりそのねらいは，当該地域においてアメリカの直接的なプレゼンスを感じさせず，陰で反共政権を支持し，支配することである。低強度という用語は最小限の行動とアメリカ軍自身が低度の損害ですむ展開を意味しているが，実際には代理軍による草の根レベルの全面戦争になる場合がある。

た可能性がある。アメリカは，共産主義から人民の支持を引き離すために，反共自警団を草の根レベルで養成することに関与していた。しかし，フィリピン政府軍や自警団が実行した軍事的戦略は，逮捕，拷問，投獄，抑留，虐殺，銃撃，爆撃などの無差別な暴力行使であり，住民の心情的離反を深めていた。政府軍は，MNLF や NPA に対処するために，ベトナムで実践された戦略村計画の焼き直しを行ったといわれている［ベリョー 1991：66-68］*24。

戒厳令が布告された1972年9月から1985年の終わりまでに7万人が逮捕され，602人が「行方不明」になり，その大半が政府軍の手によって殺されているという。また，2225人が政府軍によって監禁，処刑され，1977年から1985年の終わりまでに300人の女性が暴行されたと報告されている。ミンダナオ島では1982年だけで50万人が避難を余儀なくされた［ベリョー 1991：66-70］*25。

自警団のなかでもミンダナオ島で悪名高かったのが，イラガ（Ilaga：ネズミ）を自称する武装集団であった。イラガの隊長は不死身であると信じられていた。隊長は痩身なので，「つまようじ隊長（コマンダー・トゥースピック）」と呼ばれていた。イラガは敵の耳をそぎ落とすなどの残虐行為をすることで恐れられていた。1970年3月，コタバト州ウピ（Upi）町でイラガによって6名の住民が虐殺された。これを端緒にイラガによる殺害が頻繁におこり，異常な心理的恐怖が煽られていった。

イラガは反ムスリムを結成の目的としたものではなかった*26。しかし，イラガは治安警察（Philippine Constabulary）によって訓練されており，マグニフィセント・セブン（Magnificent Seven）といわれるコタバト市のクリスチャン町長関係者7人によって組織されたと報じられた。これがクリスチャン側の集団である証左とされ，イラガは反ムスリム的集団であると解釈されていったのである［George 1980：144-151］*27。

これに対してムスリムの有力政治家もブラックシャーツ（Blackshirts）やバラクーダ（Barracudas）という武装集団を作って自衛を開始した。1970年代に，ミンダ

---

*24　村，または都市の数ブロックほどの地域の周囲に非常線を張り，住民に身分証明書を発行し，外出禁止令を出す。要所要所に検問所をもうけて軍隊を配置し，村をしっかり管理することによって，ゲリラ活動をする反政府勢力を支持基盤である住民から切り離し，村落において食糧と徴兵の確保ができないようにすることがねらいである。

*25　マルコス時代は草の根レベルでの軍事化が急激に進展した時代であった。政府軍は1967年から1975年までに6倍に膨れ上がり，軍事予算は1972年から1976年までの間で5倍に増えた。政府正規軍のうち半数以上がミンダナオ島に投入されている。また，マルコスは政府軍の軍人を開発機関などの文民政府機構に積極的に登用した。例えば，ミンダナオ島の開発を管轄する南部フィリピン開発計画（Southern Philippines Development Program）の長官も政府軍の軍人であった［Abinales 1982］。また，同体制期には「民間作戦」によって，大衆の人気を得るための陸軍工兵隊が道路や橋をつくるために動員された［ベリョー 1991：54-55］。

*26　イラガの指導者は当初，1967年に行われたコタバト州知事選挙で国民党の候補者の勝利を目指し，ムスリム，クリスチャンに関係なく擁立する候補者に対抗する政治家を襲っていた。

*27　イラガの主体は，パナイ島，ネグロス島出身のイロンゴ（Ilongo，クリスチャン）であった。イラガはイロンゴ人の町村長の再選を狙う組織とも，マルコス政府や国民党の私兵とも，反ムスリムのクリスチャン武装集団とも解釈される［George 1980：144-151］。

ナオ島には約30ものテロ集団があったといわれている［鶴見 1986：178］。1967年のコタバト州知事選挙，1969年の大統領選挙，1970年憲法制定会議議員選挙，1971年の北ラナオ州，コタバト州知事選挙には，これらの武装集団が有力政治家によって動員され，ミンダナオ島では暴力事件が日常化し，避難民が続出した。

1971年6月にはコタバト市近郊のマニリ（Manili）で，モスクに手榴弾が投げ込まれ，死者65人を出す惨事が起こった。ムスリムの聖なる礼拝堂に対する攻撃に対して，報復攻撃が行われた。また，元フィリピン大学の講師であったミスワリを含む30人のムスリム・リーダーは，同攻撃がイスラム共同体に向けられたものであるとして，断固として抗議する旨を新聞に発表した。同年8月には，ムスリムの一民族集団であるイラヌンが居住するブルドン（Buldon）町で政府軍も加わった戦闘が起こった。こうして暴力が暴力を生む流血沙汰は，次第に宗教グループをターゲットにする攻撃と報復に性質が変わっていった［George 1980：162-177］。

南コタバト地方にも1970年代前半，イラガによるウピ町の殺人，マニリのモスクにおけるムスリム大量虐殺の不穏な噂が届いていった。そして実際に隣人がイラガに耳を切り落とされるなどの被害に直面する事件が起き，同地方のムスリム系住民は警戒心を高めていた。同時期に南コタバト地方は，スララ町（Surallah）で展開されたスララ町長とパナミン（The Presidential Assistant on National Minorities＝PANAMIN）*28長官エリサルデ（Manuel Elizalde）の衝突，それに開拓民の進入に抵抗する山地民マノボの抗争が絡み合い，無数の紛争が起き，暴力が野放図に広がる土地になっていた［George 1980：155-161；鶴見 1984：174-177］。これに対して，サンギル・コミュニティは自警団モロ・ファイターズ（Moro Fighters）を組織し始めた。サンギルにとっては，ブラックシャーツやバラクーダは同じムスリムでもマギンダナオ有力政治家の私兵にすぎず，サンギルを防衛してくれることなどは期待できない存在であったからである。

同じ頃，マレーシアのサバでミスワリを含む若いムスリム・リーダー90名が軍事訓練を開始し*29，MNLF とその軍事組織であるバンサ・モロ軍（Bangsa Moro Army）の結成を準備していた。1971年，さらに300名が同様にサバで訓練を受けた。トップ・スリーハンドレッド（Top 300）と呼ばれたこのグループに南コタバト地方のMNLF 支部である南コタバト州革命委員会（Selatan Kutawato State Revolutionary Committee）の議長となるオットー・サリム（Uttoh Salem Cutan，タウスグ）が加わっていた。サリムによると，当初サバでは2年間の軍事訓練を受ける予定でいたが，イラガによる軍事的攻撃が拡大して

＊28　PANAMIN＝国家少数民族関係大統領補佐局。1976年発足。少数民族の社会，経済援助計画，再居住計画を掲げたが，マルコス政権とエリサルデ長官の私利私潤のために利用されたという批判がある［鈴木，早瀬編 1992：179］。詳しくは Anti-Slavery Society：［1983］参照。

＊29　このグループはトップ・ナインティー（Top 90）と呼ばれた［Angeles 1996：113；George 1980：143-161］。

いったために，6ヶ月で帰国せざるを得なかったという。南コタバト地方に戻るとサリムは，サンギルを組織化するために，モロ・ファイターズの指揮をとるアブドラ・ダン（仮名）に接触。彼を説得することでモロ・ファイターズをMNLFに吸収した*30。

MNLFの組織化が始まると，政府軍もさらに警戒態勢を強めていき，1970年代前半に入ると，南コタバト地方は一触即発の状態となった。キアンバ町では緊張関係は町長の妻殺害*31，同町ツギスで盲目のムスリム男性が殺害されるという偶発的な殺人が導火線になって*32，一気に大量避難民を発生する紛争状況に陥っていった。

1980年代前半，ジェネラルサントス市にはこれらのムスリムの避難民が集まり，市場の前にはポーロック・イスラム（Purok Islam, Purok は村より小さいコミュニティの単位を指す）という小規模販売業者の集落が形成された。南コタバト地方の治安が落ち着きを取り戻したのは1980年代半ばである。ツギスでは，住民が戻ったときには，家屋は壊され，所有物は失われていた。南コタバト地方は，大量避難民をだし，組織的な虐殺が起こった1970年代半ばから，住民が故郷に戻り始めるまでの約10年間，紛争状況にあったといえるだろう。

III．紛争のさまざまな局面における女性

以上のように，南コタバト地方では様々な武力集団による恣意的な暴力行為が住民の恐怖心を煽っていた。これに対してサンギルもモロ・ファイターズやMNLFの下に組み込まれてゆき，次第に全国レベルの分離運動に結び付けられていった。南コタバト地方に秩序が回復する1980年代半ばまで，ムスリムの女性たちは戦闘準備，避難，家族の殺害，性的暴力の恐怖のなかで，生きのびるために必要な活動に携わっていった。以下では，さまざまな局面で紛争に遭遇した経験をサンギルの女性たちの語りを中心に検討し，破壊された状態からどのように生活を再建していったかを記述的に説明したい（年齢は1976年現在とする）。

---

*30　1995年11月8日，サリム氏に対するインタビューによる情報。

*31　1976年，マアシム町でハッジ（メッカ巡礼の義務を果たしたムスリム）の娘が結婚式中に政府軍の軍人に連行されるという事件があり，ムスリムは警戒を強めていた。また同時期にMNLFの野戦司令官（field commander）は，自分の父親が政府軍の軍人に捕まったという情報が入ったので，沿岸道路を点検する命令を出していた。そんなある日，ファミリィーライナーという私営のバスが，キアンバ町長の妻と護衛の第15歩兵旅団の2人を乗せてジェネラルサントス市を出発し，キアンバ町に向かっていた。同バスがマアシム町ダリアオ村（Municipality of Maasim, Barangay Daliao）にさしかかると，数人のMNLFの兵士が停止サインを出した。バスのなかを調べようとMNLFの兵士が乗り込んだその瞬間，窓の外を覗いた歩兵は，銃を構えたMNLFの兵士数人をみて驚愕し，あわてて発砲した。銃声を聞きつけたMNLFの兵士が応戦したので，バスの中は銃撃戦になった。町長の妻は銃を携帯しており，歩兵を援護射撃したために亡くなった。妻を殺されたことに憤慨した町長の家族は，マルコスに政府軍を派遣することを要請。政府軍による復讐により，南コタバト地方のムスリムの村は一斉に武力攻撃を受け，多くの家が焼かれ，人が殺害され，避難民が流出するという紛争状況に突入したとサンギルは解釈している。

*32　ツギスでは，水牛に乗った盲人のムスリム男性が政府軍の軍人に銃殺されてから恐怖が広がった。その男性は，政府軍の軍人に水牛から降りるように命令されたのだが，目がみえないためにもたついてしまったのだという。盲人を容赦なく殺害する政府軍の態度に住民は「盲人を殺すくらいなら，普通の人はもっとたやすく殺すにちがいない」と驚愕した。その晩，住民はモスクに集まり，パンボート（動力船）でツギスから避難することが決行された。

筆者がインタビューしたのは，女性28名に対してであった。南コタバト地方に紛争が広がったのは，筆者がインタビューを行った1995年から約20年前のことである。インタビュー当時（1995年）のインフォーマントの年齢層は表4の通りである。インフォーマントはいずれも南コタバト地方沿岸の半農半漁のムスリム・コミュニティに住んでいる。南コタバト地方沿岸にはクリスチャンとムスリムのコミュニティが散在している。ツギスを例にとれば，ツギスはムスリム・コミュニティであるが，タンビリル村のクリスチャン・コミュニティと隣接している。

1970年代，これらのムスリム・コミュニティにおいては手こぎのボートでも一日20～30kgの漁獲があった。しかし，その後ジェネラルサントス市を中心に商業漁業が活発になり，乱獲が進んだ1990年代には，漁獲が不安定なため漁業以外の収入源を模索する世帯が増えている。

28人の女性に対して，戦いに参加した女性には MNLF に参加した動機から活動を休止するまでの話を，その他の女性には避難を余儀なくされた時点から1995年時の居住地に落ち着くまでの話を時系列的に聞いた。インタビューを整理してみると，紛争中の女性の経験を6つの項目に分けることができた。すなわち，1．戦いに参加する女性，2．日常性の破壊，3．家族の連行，殺害，4．性的暴力，5．生活の再建，6．不正，暴力への抗議，の6項目である。この項目には，政府軍の直接的な攻撃対象にはならなかった一部の特権的ダトゥ層の経験や，紛争中に亡くなり，活路を見いだせなかった女性の話は含まれていない。項目はいわば28人の経験の断片を主なタイプに分けたものである。しかし，断片を組み合わせていくと，紛争によって破壊された環境から，さまざまな活路を見出し生活を再建するサンギルの女性の姿を再現できると考える。

1．戦いに参加する女性

MNLF の南コタバト州革命委員会の議長になるサリムが南コタバト地方に戻ると，住民を MNLF のメンバーとしてリクルートする活動が展開された。サンギルのコミュニティには，不定期にマギンダナオの野戦司令官（field commander）や看護婦の資格を持つ女性が巡回し，住民に MNLF の理念や「モロ」が置かれている政治経済状況一般を説明した。実戦には参加しないが，説明会に出席したり，金や食料を寄付する形で間接的に MNLF と関わっていた人は「サポーター」と呼ばれていた。

MNLF は，実戦に備えた戦闘訓練と，解放戦線の後方で負傷兵を看護するための訓練を行った。サンギルのコミュニティには1家族から1人，軍事訓練または看護訓練に参加することが呼びかけられた。これらの軍事訓練と看護訓練はダリアオ村など数ヶ所で集中的に数週～1ヶ月間行われ，その後は各自が出身村で待機し，ローテー

表4　インフォーマントの年齢層

	20～24歳	25～29歳	30～34歳	35～39歳	40～44歳	45～49歳	50～54歳	55～59歳	合計
女	2	3	4	9	2	2	5	1	28

年齢は1995年当時のものである。

ションでダリアオ村の MNLF 基地に待機した*33。MNLF での女性の役割は主に看護婦として負傷兵の手当をし，物資の調達や情報の伝令をすることであった。このように実戦に備えて軍事訓練と看護訓練に参加した人は「メンバー」と呼ばれていた。

看護訓練の内容は応急処置（銃弾の取り出し方，注射の打ち方，傷の手当，包帯の巻き方，骨折治療，体温の正確な計り方）であった。この訓練とあわせて，モロの歴史，政治，経済情勢に関する講義も行われたという。軍事訓練の内容は，体力トレーニング，棒やナイフを使った訓練，サイレント・ウォーク（音をたてないで歩く訓練），銃の撃ち方や解体・手入れの仕方，味方が殺された時の対処法（氏名が敵に判明しないように顔をつぶす）などであったという。

訓練に参加した動機はいずれも家族，親戚，友人が MNLF のメンバーであったり，積極的なサポーターであったからである。つまり住民は，説得工作によって強く動機づけをされ，リクルートされていったといえる。戦闘が開始されるとメンバーに対して随時動員命令が下るが，参加することは強制ではなく，一時的に活動を休止することもできた。

A. A.（21歳）

MNLF が組織し始められた時，私はモロ・ファイターズを組織したアブドラ・ダンのお店を手伝っていました。ある時すでに看護訓練に参加した女性が「応急処置を学んで，戦線に立つ兵士の後ろで待機することは同胞のためなのだから，一緒に看護訓練に参加しよう」と説得するので，何度か彼女について MNLF のミーティングに参加しました。1975年ごろ，その女性がマアシム町ダリアオ村で行われる1ヶ月のトレーニングで応急処置を教えるというので，ついていきました。

1ヶ月間の訓練後，私はフアゴに戻りました。そしてグループごとに交替でダリアオ村の MNLF の基地に待機しました。私のグループはツギス，フアゴ出身の15人でした。時々負傷兵が運ばれてくるので，手当をしました。そんなある日，オットー・サリムがダバオの山での戦闘に参加する女性を募ったので，私は行くことを決めました。ダバオの野営陣地では朝5時に政府軍に攻撃され，私は背中を銃で撃たれ，這いずって逃げる経験をしました。仲間に手当をしてもらってやっとのことで山を降りました。

A. A. はダバオでの戦闘後も，時々 MNLF の基地で待機し，負傷兵の手当に当たった。彼女は1995年の時点でも MNLF の看護隊であり，ムスリム同胞のために戦うムジャヒッダ（ジハードに参加する者）であると語った。もはや看護訓練はなくなったが，MNLF のミーティングがあれば，随時参加している。

B. B.（18歳）

---

*33　調査中，筆者はマアシム町ダリアオ村とアラベル町カワス村（Barangay Kawas）で看護訓練が行われたことを確認した。その他どこで訓練が行われていたかについては今後調査したい。

1975年頃，看護訓練に参加した私はツギスに戻っていました。何週間か経った後，オットー・サリムが訪ねるように緊急のメッセージを送ってきました。サリムは「これからアラベル（Municipality of Alabel）で戦闘があるが，参加する気はないか」と尋ねました。私は応急処置の訓練で一番よい成績をあげたので，アラベルでの戦闘に参加する10人の女性に選ばれたのです。

アラベルの山中には1ヶ月間ほどいました。山中はビラアンが案内役をつとめました。1週間の予定だったのが，政府軍のチェックポイントの間隙をねらって外へ出るのが難しく，1ヶ月間もいることになったのです。この間に銃の撃ち方，解体の仕方を教わりました。そしてとうとう1ヶ月後，チェックポイントで政府軍と衝突し，1人が負傷，1人が死亡しました。その負傷兵は眉毛の上を撃たれていました。それを私が手当しました。

B. B. はアラベルの山での紛争後，ツギスに戻り高校*34に通いだした。ツギスから人々が一斉に避難することになると，彼女も避難を余儀なくされ，ジェネラルサントス市に逃れた。1977年にジェネラルサントス市で高校に復学した。卒業後は，中断をしながらも大学に進学した。高校生の時から1995年の時点まで B. B. は MNLF のミーティングに随時参加してきた。武力対立が激しかった1970年代後半から1980年代前半には，MNLF に物資を調達する役割も担った。南部フィリピン和平開発評議会（Southern Philippines Council for Peace and Deveolpment）*35が設立されたとき，彼女はそのスタッフに応募したが，採用されなかった。

2．日常性の破壊

(1)戦渦に巻き込まれる：暴力の恐怖

キアンバ町では，町長の妻が殺されてから（＊31参照）政府軍によるパトロールが頻繁になり，緊張関係が高まっていた。そしてとうとうツギスで盲人のムスリム男性が政府軍に射殺されたことをきっかけに（＊32参照），住民がキアンバ町から一斉に避難することが決行された。ツギスでは男性が殺された当日の夜から人々がモスクに集まり，海上パトロールの目をぬってパンボート（モーター付きの船）を往復させ，住民が避難することになった。又，ツギス以外のコミュニティでは山に避難した人もいた。

C. C.（36歳前後）

紛争以前は，私はお米の収穫を手伝って，夫は魚をとっていました。私たちは，町長の妻が殺された時は，まだツギスに残っていました。しかし，盲人の男性が殺されたので，バンカ（bangka：モーターなしの船）があるものは自分のバンカに乗って逃げ，バンカがないものは隣人のパンボートやバンカに乗って逃げだ

＊34　初等教育を終えた後の中等教育機関を「ハイスクール」という。就業期間は4年間。
＊35　1996年の和平合意により，3年後に自治政府樹立を準備するために設置された暫定行政機構。議長にはミスワリが就任した。

しました。近所の家が焼かれて，隣の村からも煙が見えました。パンボートを往復させてツギスの人は避難しました。私たちは7人の子供を連れて避難することになりました。その後，私たちの家は燃やされ，置き去りにした家財やニワトリ，水牛などの家畜は，みんな盗られてなくなってしまいました。クリンタン（こぶつきのゴングを八つ水平にならべた楽器），アゴン（こぶつきゴングをつるした楽器），タム（ベテルナッツを入れる銅製の入れ物），パタキア（食台）など古くからつたわるものは，家の近くにある石の間に穴を掘って隠しました。けれど，たぶん近所のクリスチャンが隠した場所を軍人（政府軍の軍人を指す）に教えたのでしょう。場所が分かってしまい，掘り返されてしまいました。マロン（腰布）などを入れていた大きな鞄もなくなってしまいました。きっと鞄をとっていった後に家を燃やしたに違いありません。

D. D.（31歳前後）

ツギスで最初に殺されたのは盲人の男性でした。ある午後，私たちが水田で働いていると姪がやってきて，「男の人が軍人に殺された！」と告げたのです。私はいちもくさんに水田から家に戻って，他の人にこのことを伝えました。皆は，「軍人は盲人ですら殺すのだから，普通の人はもっと容赦なく殺すに違いない」と話をしました。また，近所のクリスチャンが，「とにかく避難しなさい，今避難しなければ軍人に殺されるから」と促しました。そこで私たちは子どもを呼び集めて，服やマロンをつめて，避難する用意をしました。そして夜を待ってモスクに行くと大勢の人がモスクやその隣の墓場でパンボートを待っていました。

E. E.（26歳）

イラガがやってきた時，私たちがどれだけ苦労したかは言い尽くすことができません。私は四番目の息子を出産したばかりでした。雰囲気がとても緊張していました。畑に出てイラガに出くわすものなら殺されていたでしょう。とても恐ろしくて外へ出ることができませんでした。コタバト市からマギンダナオの女性がやってきて私たち女性を組織するためのセミナーを開きました。私は子供を産んだばかりだったので参加しませんでした。

状況はどんどん緊張していきました。今度はイラガに代わって政府軍がやってきました。政府軍がやってくるとまるで軟禁されているようでした。彼らは，夕方4時になると一軒一軒の家に上がり込んで，MNLF のサポーターがいないか調べにきたのです。だから夜中に MNLF が寄付を求めにやってくると，私たちは素早くお米を分け与えて，「軍人に見つかったら大変ですから，どうかすぐに出ていって下さい。軍人に見つかれば尋問されて殺されてしまうのです」と追い返すように帰しました。軍人は見知らぬ顔があれば射殺するのです。それに朝方「もし，夜に『レベルデ』(reberde：反乱軍）に食べ物を渡しているのなら，殺すぞ！」と警告するのです。ある日とうとう近所の人が射殺され，それをきっかけに人々は避難し始めました。

避難は突然決行されたうえ，パンボートには最大10〜15人ほどしか乗れないため，土地や所有物をすべて置き去りにし，着の身着のまま避難しなければならなかった。C. C. のように財産を隠したものも少なくなかった。だが，住民が避難したあと，政府軍や一部のクリスチャン隣人は財産を掘り返し，住居を全て焼いていったと語る。避難中にサンギルのココナッツをクリスチャンが収穫したり，タンスなどの持ち物がクリスチャンに持ち去られることもあったという。紛争後にサンギルが自分の所持品をクリスチャンの家で見つけることなどがあり，所有物が盗まれたことは，紛争後にサンギルとクリスチャンの間に感情的なしこりを残すことになった。こうして南コタバト地方のサンギルは土地を離れ，生計の手段を失い，財産を出身村に残して身一つで新しい土地で生きのびる手段を模索することになった。

(2)避難：生きのびるための移動

サンギルは親族ネットワークを頼りに避難ルートを決めていった。ツギスの人々を例にとると，まずさまざまなルートで一時サランガニ湾対岸のサンギル・コミュニティがあるグラン町ポブラシオン(Pobracion, Municipality of Glan）やバリトン村(Barangay Baliton, Municipality of Glan）に避難する。ところがグラン町ポブラシオンやバリトン村でも政府軍の攻撃が始まったため，多くの人が同じくサンギルのコミュニティがあるバルート島(Balut Island）に渡った。しかし，1978年頃に起きたバルート島における政府軍とMNLFとの軍事対立により，住民の多くがジェネラルサントス市へ避難せざるを得なくなった。

F. F.（26歳前後）

私は当時妊娠7ヶ月でお腹が大きく，とても山に避難できる状態ではありませんでした。だから自分はここに残ると言い張りました。すると，「他にも妊婦はいるんだよ。彼女たちだって歩けるんだ。とにかく歩けるところまでいってみるんだよ」と隣人に励まされました。それで，私はお守りのために小銭を全部ばらまいて，身一つで飛び出しました。

山へは家族そろって逃げました。けれども，翌日夫は弟の仇を討つといって，MNLF の戦闘に参加するためにアラベルの山に行ってしまいました。夫の弟は，罪もないのにダリアオ村の学校に連行され，そしてキアンバ町ポブラシオンで殺されたのでした。私は4人の子供とお腹の赤ちゃんをかかえて取り残されてしまったのです。

山のなかでは恐ろしい思いで過ごしました。軍人が海上から長距離砲を撃ちました。長距離砲が木に命中すると，上から枝が落ちてくるのです。私の義父は木の枝の下敷きになり，耳が聞こえなくなってしまいました。山では食べ物がなく，妊娠していた女性の一人が亡くなったときはショックでした。次は私が死ぬのではないかと他人が話しているのを聞いて，私は恐ろしさに震えました。

山には2ヶ月間くらいいたでしょうか。そのうち軍人が下山するように号令を出したので，私たちはマアシム町カトバオ村（Barangay Katubao, Municipality

of Maasim）の小学校に集められました。学校につくと，私は産気づいたので軍人と助産婦に村長の家に連れて行かれて，末息子を産みました。そこで解放されたので，私は生まれたばかりの末息子と4人の子供をつれてグラン（グラン町ポブラシオンのこと）へ向かいました。

グランで私はココナッツを拾い集める仕事をしました。拾い集めたココナッツを肩に担いでプゴン（ココナツを乾燥させてコプラにする木製のかまど）まで持っていくのです。次に鉈を使って乾燥させたココナッツの外皮を剝ぎます。この仕事はとてもきつくて辛かったです。その他，バグース（bangus：サバヒイ，英語名＝milkfish, *Chanos chanos*）の稚魚が現れればすくって生計を立てました。それから私はダジャンガスへ行くことに決めました。

D. D.（31歳前後）

バリトン村で私たちは同じように避難してきた人がたくさん集っているところにいました。仕事はありませんでした。それでも何とか日々の糧を得ようと必死でした。カンコン（kangkong：葉野菜，*Ipomoea aquatica*）が水田に生えていればそれをとって料理し，食べました。何日もこれが私たちの食事だったのです。もし運がよく，バグースの稚魚が現れれば，すくってお金を稼ぎ，お米を買うことができました。でも運が悪ければお米を食べることができませんでした。カンコン，稚魚すくい，そしてバナナを探すこと，これのみでした。

5ヶ月間バリトン村にいた後に，私たちはバルート島に行くことに決めました。ここはサンギルの土地で親戚もたくさんいたのであまり気を使う必要がありませんでした。しかし，バルート島でも紛争が起こったのでダジャンガスに避難しなければなりませんでした。

ツギスの住民は，政府軍の攻撃はサンギルの避難民を追走するかのように起こっていったと語った。一説によると，町長の妻が殺された時，バスに同乗していたキアンバ町ポブラシオン（Pobracion, Municipality of Kiamba）の小学校の先生がMNLF の基地に連行され，自分の教え子がメンバーになったことを知った。MNLF の基地から解放された先生は，キアンバ町長に呼び出され，教え子の名前をいうように求められた。教え子のなかにサンギルがいたため政府軍はサンギルを追って攻撃したのだ，という。

避難中は身の安全と食料を確保することが第一であった。自分の土地から離れた住民は野生の有用植物を採集したり，政府軍の目を盗んで漁に出かけたりして糊口をしのいだ。山に避難している間は，山地民のビラアンなどから通常より高い値段で食べ物などを買ったりした。

3．家族の連行，殺害

南コタバト地方のムスリムが避難しはじめ，MNLF の活動も活発になると，政府軍による暴力もエスカレートしていった。政府軍は，「レベルデ」と呼ぶ MNLF のメンバーを見つけだす名目で，検問を厳しくしていた。沿岸の道路にはチェックポイントが設けられ，身分証明書の携帯が厳し

くチェックされた。

また，政府軍は「レベルデ」を撲滅するという名目で，住民を連行，投獄，拷問，殺害した。聞き取り調査のなかだけでも，ツギス出身の4人の男性が連行され，うち2名がキアンバ町ポブラシオンで殺害，グラン町で15名の男性が連行され（うち8名はツギス出身者），14名が銃殺（うち7名はツギス出身者）という血なまぐさい事件が記憶されていた。こうして未亡人となった女性は家長となって一家を支える役割を担わざるをえなくなっていった。

F. F.（26歳前後）

MNLF に参加した夫は時々現金を少し入れた手紙をよこしました。私は夫の手紙が読めなかったので，長男に読んでもらいました。ダジャンガスに着いてしばらくしてから，親戚が夫の死を知らせました。始めは信じませんでした。けれども，夫からの手紙がこなくなったのです。それで，やっと夫が死んだことを受け入れたのです。私も子どもも泣きました。

夫が死んで一人で家族を支えていくのは本当に大変で，思い出すととても悲しくなります。まだ昔の戦争のほうがよかった，とみんなで話し合いました。以前はアメリカや日本の飛行機に注意して隠れてさえいればよかった，今は罪がなくてもムスリムというだけで捕まってしまう，と話したものです。

C. C.（36歳前後）

私たちが乗っていたパンボートは夜中にツギスを出発してダジャンガスを目指していましたが，マアシム町ティノト村（Barangay Tinoto, Municipality of Maasim）に着いた時にはすでに日が高くなっていたので，望遠鏡で見張りをしていた海軍の軍人に捕えられ，ティノト村の海岸に連れていかれました。そして，すぐに軍人のトラックに乗せられてダリアオ村に連れていかれました。

ダリアオ村について3日目に男性が全員整列させられました。男性が整列させられている間，誰が MNLF のメンバーであるかを軍人に指摘する人がいました。その人は目に穴があいた厚い布で顔を覆われていて，誰であるかはわかりませんでした。しかし，多分クリスチャンの知人だろうということです。証言に基づいて，軍人は列の中から私の夫を含む計4人を MNLF の「レベルデ」として選びました。夫がトラックに乗せられたので，軍人に「どこに連れていかれるんでしょう」と訪ねたところ，「キアンバだ（キアンバ町ポブラシオンのこと）」と答えました。トラックがキアンバ町ポブラシオンにある駐屯地に戻るついでに4人も連れていかれたのです。そして牢屋にいれられました。

なぜ4人が連れ去られたのかは知りません。勿論，彼らがムスリムだったからでしょうが，夫は MNLF のサポーターであってもメンバーではありませんでした。私たちは寄付を集めにくれば，お米やお金を渡しましたが，訓練には参加したことがありませんでした。

G. G.（33歳前後）

ツギスからバリトン村に避難すると，

間もなくここでも紛争が起こりました。私と子供は夫を残してダジャンガスに避難しました。ところがダジャンガスに着いて2日後に夫が殺されたという知らせがあったのです。私の夫と一緒に連行されたツギス出身の8人のうち7人も殺されたというのです。それを聞いた後，呆然としてしばらく何もする事ができませんでした。

夫の死後，5人の子供たちを食べさせるためにとにかく何でもした苦労を思い出します。私が働かなければ誰が5人の子供を養うことができたでしょう。

検問所では女性よりも男性のほうが「レベルデ」である可能性が高いと疑われたため，紛争時には女性が男性に代わって移動し，伝令や物資を運ぶ役割を担った。移動中は，ビサヤ諸語（主にセブアノ語）をしゃべり，マロン（腰布）やコンボン（髪を隠すスカーフ）を身につけず，長い髪を切るなどクリスチャンと同じ格好をする工夫がなされた。避難経験も含めて紛争は女性の行動範囲を大きく広げる契機になったという。

4．性的暴力

女性は「レベルデ」であると疑われることは少なかったが，政府軍の性的暴力の対象になる危険性があった。婚前の性交渉がタブー視されている南コタバト地方のムスリム社会では性的暴力の対象となったことが，注意深く覆い隠されているようである。性的暴力の有無を問う質問には，噂をきいたことがあるという返事しか聞くことができなかった。また，数人の美しいムスリムが政府軍の軍人とむりやり結婚させられて，現在マニラに住んでいるという話も残っている。性的虐待にあった人はいないかとの質問に，その可能性を指摘された人物は一名であり，その本人にはインタビューすることを断られた。C. C. が性的虐待にあったことを話したことは偶然であった。

C. C.（36歳前後）

ダリアオ村では，夜になると軍人がやって来て女性に嫌がらせをしたのです。軍人は夜になるとやってきて女性を探しました。ダリアオ村ではそれぞれが学校の近くにテントのような家を作って住んでいました。そして，夜になると軍人が家に上がり込んで，女性の手を触ったり，身体にさわるような嫌がらせをしていきました。私たちは結核を患っているからできないというと，翌日薬だといわれて錠剤を渡されました。しかし，それは睡眠薬だったのです。その晩，軍人は再び家に上がり込んで強要しました。睡眠薬を飲んでいたので抵抗することができませんでした。他の母親の家にも軍人は上がり込みました。幸いに，ダラガ（dalaga：未婚の女性）は両親が軍人に見つからないように隠していたので被害者はいませんでした。軍人に上がり込まれたのは私たちだけでした。私もその一人でした。彼らは家にあがるとランプを消して，その様なことをしたのです。

また，婚前に処女性を失うことが不道徳であるという社会規範が強いので，娘を政府軍の性的暴力から守ろうとする苦労はつきなかった。

H. H.（32歳前後）

娘はダラガで色白で美人だったので，軍人に連れていかれはしないかと，とても心配でした。だから，袖のところなどに穴が開いているボロ服を着せ，髪をボサボサにし，子供を抱かせて，年をとっている女性に見せました。

カトバオ村に避難していた時は，軍人が「ダラガがいる家はどこだ」と探しに回るので娘を隠しました。外に用をたしに行くのも夜だけにさせました。私は心配で痩せ細ってしまいました。

H. H. の娘（13歳）

当時私は色白な年頃の娘でした。そこで，古い服を着せられて，長い前髪を前へぼさぼさに垂らして，とてもみすぼらしい格好をしたのです。とにかく年頃の娘に見えないことが肝心でした。そして，政府軍がやってくると，たくさん虫さされの跡や皮膚病がある見ための悪い赤ん坊を抱かされました。その子は体が痒い痒いといって騒ぐのでたいへんでした。

5．生活の再建

(1)小規模販売業

1970年代後半，バルート島で虐殺が起こると，ジェネラルサントス市にはムスリムの避難民が続々と集まり始めた。都市では食料を採取することができず，現金収入を得ることでしか家族を養うことはできない。ジェネラルサントス市の公営市場の向かい側で，フィッシュ・ランディング（Fish Landing）と呼ばれる魚の水揚げ場の隣に，ポーロック・イスラムと名がついた小規模販売業を営む避難民の集落が形成された。

1970年代に25歳前後であったサンギル女性は，一般に学校に通ったことがなく，読み書き計算ができなかった。また，女性はあまり人目に触れるべきではないという社会規範を守るように教育されたために，その多くは商業に携わったことがなかった。しかし，都会で生活を営むには現金収入を得る必要があった。そこで，多くのサンギル女性が，わずかな資本で始めることができ，参入障壁が低い魚や野菜の小規模販売業に携わった。

F. F.（26歳前後）

ああ，昔のことを，とても辛かった昔のことを思い出すと，本当に涙がでてきてしまいます。ポーロック・イスラム付近のフィッシュ・ランディングをウロウロしていると，そのうちビサヤ*36の女性が魚の売買のやり方を教えてくれました。魚を山積みにしない時は5ペソ，山積みにするときは10ペソで売るのよ，という具合に教えてくれました。こんなことも以前は知らなかったのですから。魚を買い上げる元金がなかったときは，魚をとりあえずもらって，一日の売り上げの中から返済しました。けれども，最初は恥ずかしくて，お客に声をかけることすらできませんでした。

＊36　ビサヤとはビサヤ地方出身者（ほとんどがクリスチャンである）の呼称。南コタバト地方のムスリムは「ビサヤ」をクリスチャンの総称として使う傾向がある。

I. I.（34歳前後）

ダジャンガスには10年以上住んでいました。最初は長女がスタンフィルコ（ドール社が主な株主であるバナナとパイナップルの外資農園）で働いていて，家族を養いました。1ヶ月くらいは毎日リジェクトのバナナ（輸出規格に見合わず，廃棄されたバナナ）を食べて生活しました。次女以下の6人は学校に通っていましたから，授業料と家賃を払うためには長女の収入だけではやっていけませんでした。そこで私は市場でティンダ・ティンダ（tinda-tinda：市場の小規模販売業）をしました。私は畑で働いていたので，売り方もビサヤ語も知りませんでした。そこで，野菜を売っているビサヤについてまわり，売り方を教えてもらいました。トマト，タマネギなどの野菜や調味料類を売りました。

とにかく大変な苦労をしました。午前1時に起きて農民から野菜を買って，一日中野菜を売りました。少しでも収入を得てお米が買えるように，少しでも長く売りました。そのうち，3女が同情して，学校をやめて工場でバナナを段ボールに詰める仕事をしだしました。つづいて，4女，5女も卒業して働き出すと，私は市場で野菜を売らなくてもよくなりました。

H. H.（32歳前後）

ダジャンガスの市場の辺りをうろうろしていると，たくさんの人が路上に座ってティンダ・ティンダをしていました。私は立ち止まってどういうふうに売っているのかをじっと見学しました。最初は売り方を知らず，客に声をかけるのも恥ずかしくてできませんでした。でも，段々できるようになりました。ほかにもツギス出身の人がたくさん一緒にティンダ・ティンダをしていました。

最初，わたしは野菜を買うお金が全くないか，あってもわずかでした。でも，お金がなくたって売ることができたのです。野菜をもらって，午後の売り上げの中からもらった野菜の金額を返せばよかったのです。

行動範囲を規制され，学校にも通わずに育った女性は，小規模販売業に携わり，公の場に身をさらすことに始めは居心地の悪さを感じていた。しかし次第に，同じようにジェネラルサントス市に避難してきたムスリムと活気のある市場で声を張り上げて物を売ることを楽しみ，自ら現金を稼ぐことが家族の生活の向上につながるということに気づいていった。

とはいえ同時に，わずかな資本でわずかな収益しか見込めない小規模販売業は，都会のさまざまな就業形態と比べて「貧乏人の仕事（trabaho sa mga pobre）」であると理解していく。そして，都会の就業形態である役所，デパート，工場に勤めるには男女を問わず，識字力があり，高等学校の卒業証明書が必要であることを経験によって知っていく。そのため，紛争によってさらに貧困化した状態から脱し，将来の生活を安定させるためにも，子どもの学校教育に熱心になっていった。

F. F.（26歳前後）

とにかく，私は子どもには字が書ける

ようになってほしいから，お金がなくても一生懸命働いて学校へ行かせました。私は学校に行ったことがないので自分の名前すら書けないのです。おかげで子どもたちはみんな字が書けるようになりました。サウジ（サウジアラビア）で働いていても，ちゃんと自分の名前を書けるから困りません（下を向いて，字をゆっくり一生懸命書くジェスチャーをする）。他の人は，お金がなければ，子どもに学校を止めさせるけど，私は貧乏でも学校へは行かせたくて毎日物売りをしました。私と同じように，字が書けないイグノランテなんてことにならないようにね。

G. G.（33歳前後）

10年間は苦労しました。私の苦労はすべて子どものためでした。だから子どもたちには「私の苦労を無駄にしないでしっかりやってちょうだい」といっているのです。親戚は夫がいないのにどうして子どもを学校などに通わせるのか，学費の捻出が大変ではないか，と怒りました。私はとにかく他はどうでもいいから，苦労してでも子どもを学校に行かせたいと思っていました。貧しいので土地もお金も残すことができないのですから。私が死んで残すものはただ一つ，知識だけなのです。私が死んでも学んだことは残るでしょう。だから私は一生懸命だったのです。

(2)子どもの労働

都会で生活するために，子どもも都市のさまざまなインフォーマル・セクターで働き，家計に貢献した。

F. F.（26歳前後）

夫がなくなった時，長男は小学校5年生でした。長男は本当によく手伝ってくれました。タクロン（Tacurong）まで野菜を売りにいっていた時は，長男が料理や洗濯をして，妹と弟の面倒をみてくれました。お米が足りない時は，お粥にしてご飯の量を増やして弟や妹に食べさせていました。自分は友達の所で食べたりしていたようです。

ダジャンガスの市場で野菜を売っていたときも長男が手伝ってくれました。長男はお昼休みに学校から市場にきて，ニンニクやトマトなどを箕に入れて売りました。午後2時になると箕を隠して学校に戻っていきました。そして放課後になるとまた市場を売り歩きました。

D. D.（31歳前後）

ダジャンガスでは私も子どもも働くことができたので，少しはくらし振りがよくなりました。私は主に市場で物売りをしましたが，他にピーナッツ・プランテーションの下草刈りや収穫をして一日25ペソもらうことができました。以前は物価が安かったので，それで十分食べ物を買うことができました。長男は洋裁の仕事をして稼ぎ，次男は船荷会社の倉庫の運搬人夫としてよくトウモロコシやコプラを担いでいました。三男はニュースボーイ（新聞売り）やシャインボーイ（靴磨き）でした。四番目の娘は避難した当時小学校1年生でしたが，小学校を中断して市場でトマト，ニンニクなどの調味料類を売って私の手助けをしました。

1982年に結核で亡くなった夫は当時から病気がちで働くことができませんでしたから，私一人で家族を養わなければならず，それは大変でした。ダジャンガスではシルアイ（Silway）に家を借り，毎月250ペソの家賃を払っていました。

紛争時に都市に避難した子どもたちは，放課後に都市のさまざまなインフォーマルセクターで家計を助けるために働いていた。両親がどんなに働いても，稼ぎが十分ではなく，学校を中断しなければならなかった子どもたちも多かった。紛争時に学校を中断した女性は，高校の卒業証明書が必要とされる工場やプランテーション等の労働雇用機会や海外での出稼ぎ労働者に応募するのに不利になっている。高校を卒業していない女性の中には，卒業した女性の証明書を借用して，仕事に就こうと試みるものもいる。

6．不正，暴力への抗議

紛争の犠牲となった女性が，政府軍のムスリムに対する残虐行為に抗議する活動を開始した。彼女たちはモロ女性センターというNGOを設立し，紛争中に政府軍が行った虐殺行為の記録を残す作業を進めている。また1984年には，ポーロック・イスラムに集まる未亡人を対象に識字教育とマイクロクレジット（低金利で小額の金を貸す制度）を始めた*37。

モロ女性センターの設立者の一人であるJ. J. は，ツギス出身のサンギル・マギンダナオの女性である。貧しいが教育を大切にする家庭に育った彼女は，紛争中も大学に進学した。彼女は自らをフィリピン国家，国際関係，またイスラーム世界のなかに客観的に位置づける視点を培っていった。モロ女性センターのようなNGOは，第I節のアポの話にみられるムスリム社会の問題を，先住民問題，開発・貧困問題，女性問題という国際的に共通する言説に翻訳し，訴える活動をしている。

J. J.（13歳）

小学校6年生の頃，イラガに対抗してムスリムのコミュニティではモロ・ファイターズ（Moro Fighters）やMNLFを組織する動きがありました。私の叔父アブドラ・ダンはその先頭にたっていました。私は活発な少女だったので叔父についてMNLFの基地についていったり，ミーティングに参加しました。こうして，私はMNLFの基地に口述や記述のメッセージを届ける役をするようになりました。当時MNLFの基地があったカトバオ村の山には軍人の検問所がたくさんあり，すべての荷物が点検されていました。けれども私は子どもだったので警戒されずにすんだのです。それでも紙に書かれたメッセージを運ぶことはとても危険でした。そこで，隠しポケットがあるショートパンツを作り，その上にワンピースを着て運びました。こうすると私はビサ

*37　市場の金貸し利子の相場は，20パーセントである（five-six といわれ，500ペソ借りたら600ペソを返す）。そこで，モロ女性センターでは1000ペソを借りた女性から毎日35ペソ徴収し，一ヶ月50ペソの低利子で現金を貸し出すプロジェクトを始めた。

ヤの子どものように見えたから軍人の目をごまかすことができたのです。

町長の妻が殺されて，ムスリムが避難せざるを得なくなったとき私はダジャンガスの高校生でした。父親が亡くなっていたので，母親と弟妹がグランに避難したと聞いてすぐ駆けつけました。私の家族と親戚の二家族は，ダジャンガスに小さな一軒家を借りて住みました。

ダジャンガスでは，一番上の姉や親戚の叔父がスタンフィルコ会社でバナナの収穫の仕事をしました。三番目の姉もやはりバナナの工場で包装の仕事をしました。二番目の姉はオットー・サリムについて山に入っていきました。私はなんとか高校を続けることができました。でも暇さえあれば市場で物売りをしたり，チチャロン（ブタの皮を揚げたスナック）の袋詰めをしたり，近所の人の洗濯をして小銭を稼ぎました。五番目の妹は図書館で働きながらなんとか学校を続けようと頑張りました。六番目の弟は学校のお昼休みや放課後にニュースボーイやシャインボーイとして働きました。母親はビサヤ語など話したことがなかったのに，一生懸命習って市場で物売りを始めました。私たち兄弟姉妹が自ら努力して学校を続けようとしたので，母親はとても喜んでいました。紛争がきっかけで学校を止めてしまう友達がたくさんいたのです。

私は，紛争で避難してきたムスリムが住み着いたためポーロック・イスラムと呼ばれた所で女性とその子どもを組織することを始めました。未亡人が大勢いました。彼女たちは読み書きができないので，都市で生計を立てるのがとても難しかったのです。そこで，識字の教室を一週間に一回開きました。また，市場の物売りを始めるために必要な初期資本金を10人の女性に貸し与えました。この頃ダジャンガスでも軍事化が進み，外に出ることが危険な男性に代わって女性が外で働かざるを得なかったのです。

これを機に1984年モロ女性センターを発足させました。私たちは，紛争の時代に記録されなかった虐殺を調べる努力もしています。マリスボンにおける虐殺(Malisbong Massacre)，バルート島における虐殺，グラン町で15人が殺されるなど記録されていない事件があったのです。

モロ女性センターは，これまでに女性対象の機織りプログラムや保育園の設置などを手がけてきました。現在では開発計画の進行によって強制立ち退きさせられる住民のための植林プログラムに力を入れています。最近では海外へ出稼ぎにいき，被害にあった女性の手助けをすることも私たちの大きな課題となっています。

1995年現在，モロ女性センターは，手機織り製品の販売を活動資金に，貧しいムスリム女性に対して，保育園設立やマイクロクレジットによる支援活動を続けている。また，SOSKSARGEN 地域開発プロジェクト（South Cotabato, Sultan Kudarat, Sarangani, General Santos City Area Development Program）*38の進行にともなって立ち退きを強いられた住民（ムスリム，クリスチャン，山地民を問わない）に対する支援を通じて，開発に関する問題を

国内外に訴えかける活動を行っている。フィリピン最大の女性支援組織であるガブリエラ*39と共同で女性の海外出稼ぎ労働者の支援活動を行うなど，全国規模の NGO との連帯運動も開始した。

IV. 戦禍を越えて
――紛争と女性の社会変容

南コタバト地方における MNLF と政府軍の紛争では，政府軍が MNLF のゲリラ戦術に対処するために，ムスリムに対してほぼ無差別に砲爆撃，放火，逮捕，拷問，虐殺などの暴力を行使したことが特徴である。このため，住民は暴力と隣り合わせて身の危険にさらされ，日常生活を営めなくなるほどの恐怖を憶えた。

無差別に家族が殺害されたりする暴力に直面し，調査対象となったサンギルの女性のなかには，MNLF のメンバーやサポーターになり，銃をとって防衛と攻撃に参加するものもいた。多くの女性が，家を燃やされたり，私財を置き去りにしたまま避難することを強いられた。避難先では，生きのびるため，そして子どもを養うためにさまざまな活動をした。都会では，生まれて初めて小規模販売業を始めるなど，自ら稼いだ現金で家族を支えるという経験をした。なかでも夫を殺害され，未亡人となった女性は，家長となって一家を支える役割を担わざるをえなかった。女性たちは家族の安全を守り，生きのび，生活を再建するために能動的に紛争に向き合う必要があった。

新たに生計の手段を見出し，生活を再建する過程において，サンギルの女性は新しい価値観に触れ，それを選択的に受容していった。これまでみてきたように，紛争は女性の行動範囲を広げる必要性を生み出した。紛争中は男性が MNLF のメンバーであると疑われ，政府軍に連行，殺害される危険性が高かった。男性は移動を控え，政府軍を警戒して身を隠さなければならなかった。このため，行動範囲を規制する社会規範に反して，男性の代わりに物資を運搬し，移動する役割を担ったのは女性であった。

紛争時に20～30代であった女性は，彼女たちが10歳くらいに達したときにはすでに結婚可能な年齢に達したと考えられていた。女性の処女性が重視されていたために，婚前の処女性を管理する必要性から男性との接触がある学校に行くことを禁止され，外出時にはかならず同伴者を連れ添うようにと教育されていた。I. I. は彼女がダラガであったときに「男性の来客があれば祖母に付き添われて奥の部屋に隠れていた」と語り，同じく H. H. は「両親の了解を得ずに隣村に出かけただけで平手打ちをくらった」経験を話した。このような女性は，避難して移動したり，市場で客に声をかけたりすることに始めは抵抗があった。しかし，紛争により，家族を支えるという条件において，女性が商売をしたり，移動したりす

---

*38　多国間協力フィリピン援助計画（Philippine Assistance Program）の一環。その主な開発プロジェクトは1．道路建設，2．新ジェネラルサントス国際空港建設，3．マカール埠頭改築，4．漁港建設，5．農業加工センター建設，6．通信施設導入である。

*39　General Assembly Binding Women for Reforms, Integrity, Liberty and Action（GABRIELA）。新植民地主義からの女性の解放を目指し，女性の権利拡大を実現するための運動を展開している。1984年設立。

ることを彼女たち自身が容認し，また南コタバト地方のサンギル社会も受け入れていった。

今日でも男性と女性が二人きりになることは許されず，女性は男性に誤解されるような言動をしてはいけないという規範は強い。にもかかわらず彼女たちは，もはや自分の娘時代と同様に性別隔離をしなくなったと語る。

F. F.

母はとても厳しく私が一人で外出することを決して許してくれませんでした。だから私はダラガ（未婚の女性）のときはよく家の中で裁縫をして過ごしました。私たちは今の人のようにグループ交際をすることもありませんでした。グループ交際をするといって，実は山とか海岸，川辺などでボーイフレンドと会っているということにもなりかねませんでしたから。今の人は平気で男の人の目を見ながら話をすることができるけど，私がダラガの時には目を見るなんてとんでもないことでした。男の人が家を訪ねてくれば，私は近所の家に隔離されたり，別の部屋に隠れていなければなりませんでした。だから，若いころは本当に男の人が恐かったのです。

彼女たちは，自分たちがダラガであった頃に存在した女性の行動範囲を厳しく制限する規範は，失われつつあると語るようになった。つまり彼女たちは，紛争時の経験を通じて，支配的であった行動規範を自らの経験や生存戦略の必要に応じて操作し，新しい定義を生み出していったのである。

なかでも行動範囲を制限されたために，学校に行かせてもらえなかったことは否定的な意味合いを含んで語られる。これまで見てきたように，都会に避難した多くの女性は，市場の違法サイドウォーク・ベンダーになった。彼らは都会のさまざまな就業形態のなかでも，サイドウォーク・ベンダーは「貧乏人の仕事」であることを認識していく。そして，都会で高収入を得る職に就くためには，読み書き計算ができることに加えて，高校の卒業証明書が重要であることを経験的に知るようになった。

こうしてサンギルの女性は，行動範囲を規制されたために，学校教育を受ける機会が少なかった世代の女性像を否定的にとらえていく。そして，クリスチャンなどの植民者によって「ムスリムはイグノランテである」と規定された価値観を「われわれはイグノランテであった」という否定的な自己規定として認識していった。

G. G.

昔の人はイグノランテで，学校には行きませんでした。ムスリムがあんまり学校を嫌疑するので，学校の先生がわざわざ生徒を探しに村までやってきたくらいでした。当時は靴を履いているのは学校の先生くらいだったので，地面に靴の跡を見つけると，子どもたちは隠れているようにいわれました。でも皮肉といったら皮肉ですね。以前子どもを学校に行かせたくなかった時には授業料がタダなうえ，鉛筆やノートまで支給してくれたのに，みんなが教育熱心になって子どもを学校に行かせたいという時になってみると授業料が高すぎるなんて。

学校教育がキリスト教徒に同化するための手段と考えられていたことは今日では笑い話となっている。

F. F.

当時はビサヤの先生が，私たちがイグノランテにならないようにと村まで子どもを探しにやってきました。しかし，私の両親は学校に行ったら子どもが豚肉を食べさせられてかえってバカになるのではないか，娘がクリスチャンと結婚してしまうのではないかと心配で，先生が来れば子どもを隠していたのです。

イグノランテとは，基本的に文字が読めないことを指すが，学校教育がクリスチャンに同化するための手段であると考えたこと，貨幣経済を理解しなかったこと，そのために土地を失ったことなど，近代的価値一般を理解できなかった状態を指す。紛争によってさらに貧困化した状態から脱し，将来の生活を安定させる生存戦略として，サンギルはイグノランテにならないために子どもの学校教育に積極的になるという視座の転換をしていった。

結びにかえて

女性が行動範囲を広げて現金収入を得る仕事に就く過程は，紛争が起こらなくても資本主義経済の浸透と並行していずれかはサンギル社会にもたらされた現象であったかもしれない。紛争はこの過程を加速する媒体となった。紛争を経験した母親の世代が紛争を転機に行動範囲を広げ，教育に対する考え方を見直し，教育を受けなかった自分を否定的に捉えるという視座の転換をしたことに象徴的に現れている。ムスリムの女性にとって教育を受けることは，単に知識を得ることや生存戦略にとどまらず，彼女たちが若い女性の処女性を管理する規範を変更することを意味していた。紛争はそれを経験した母親の世代に，娘の処女性を厳格に管理するよりも，女性が家計に貢献できるように教育を受けることが必要であることを認識させた。

だが，教育を受けたサンギルの女性が増えても，南コタバト地方における雇用機会は限られており，生活向上にはなかなか結びつかない。1995年に筆者が会ったジェネラルサントス市の市役所で働くムスリムのなかにサンギルの女性は一人もいなかった。ジェネラルサントス市に三つあるデパートのうち一つではムスリムに対する偏見が大きいため，ムスリム女性は雇わない方針であるという噂がある。履歴書にクリスチャンであると偽って都市のサービスセクターに就職するムスリムもいるがその数は限られている。南コタバト地方のバナナ，アスパラガスのプランテーション工場，マグロの缶詰工場などの働き口は，契約労働者のみが募集されるので6ヶ月ごとに解雇となる。都市での生活は，衣食住などの生活費に加えて交通費も自己負担であり，給料はなかなか貯金できない。こうして多くの女性が効率よくお金を稼ぐ手段として海外へ出稼ぎに行くのである。海外で働く女性はギャンブルをするようなものだ。親切な雇用者を紹介されれば，衣服を買ってもらったり，帰りに時計やアクセサリーなどのおみやげをもらって帰郷することができる。そうかと思えばリクルーターにだまされた

り，雇用者に酷使されたりして，土地やアクセサリーを担保にいれてリクルーターへ支払った手数料すら稼げない女性もいる。

筆者がインタビューした多くのサンギル女性は，暴力への憤り，避難中の惨めな生活の辛酸をなめながら生活を再建していった過程を話した。彼女たちの数名は自分が現金収入を稼ぐことによって家族を養ったと自負し，子どもに教育を受けさせることで，生活が向上することを願って一生懸命働いたことを強調した。しかし，教育を受けた子どもの雇用機会さえ限られており，就職したとしても安価な賃金で雇われる。現実の労働に対する報酬の低さと新しい消費欲望のギャップに挫折感すら生まれている。

一方，行動範囲を広げ，都会で働き，MNLF やイスラム復興運動の言説に触れ，学校教育を受けた女性のなかには，客観的に自らをフィリピン国家，国際関係，そしてイスラーム世界のなかで位置づける視点を培っていった人もいた。モロ女性センターのような NGO は，第 I 節で紹介したアポの言説にみられるムスリム社会の諸問題を，少数民族問題，開発・貧困問題，女性問題という国際的に通用する言説に翻訳し，国内外に訴えかける活動を開始した。

最後に，南コタバト地方のサンギルの MNLF に対する支持について述べたい。MNLF は外資に依存した国内植民地主義的な開発を推進してきたフィリピン中央政府に反発して，独立（後に自治）を勝ち取るための闘争を続けてきた。しかし，結局は外資に依存する経済発展とは別の選択肢を模索しえないまま，和平に合意した。MNLF のミスワリ議長の発言には，「モロのホームランド」に外資を投入して発展させることで，貧困問題を解決しようとする政治的姿勢が窺える。しかし，和平合意によって設置された南部フィリピン和平開発評議会の南コタバト支部では，1996年9月に発足してから筆者が訪れた1997年10月までの約1年間に，予算不足でプロジェクトはほとんど行われていない状態であった。住民はジハードの思想と同時に，ムスリムのムスリムによる統治が，貧困に対して救済をもたらすというユートピア的期待を抱いて MNLF を支持していたが，住民のニーズに答えない MNLF に対して人々の間には失望感が広がっている。

1984年，MNLF 発足時の指導者であったハッシム・サラマト（Hashim Salamat）は MNLF から分離してモロ・イスラム解放戦線（Moro Islamic Liberation Front）を組織した。また，MNLF の指揮下から離脱した武装グループ（lost commandと呼ばれる）やテロ組織「アブ・サヤフ」の活動が存続するなど，ミンダナオ島に平和がもたらされたという安堵感はまだない。

参考文献

Abinales, P. N.
1982 *Militarization in the Philippines*. The Philippines in the Third World Paper Series, No. 33. Quezon City: Third World Study Center.
Ahmed, A.
1987-88 Class and Colony in Mindanao: Political Economy of the National Question, *Moro Kurier* 3(1-2): 29-36.
Angeles, Vivienne SM.
1996 Women and Revolution: Philippine Muslim Women's Participation in the Moro National Liberation Front, *The Muslim World* 86(2): 103-147.
Anti-Slavery Society
1983 *The Philippines: Authoritarian Government, Multinationals and Ancestral Land*. London: Anti-Slavery Society.
Bauzon, K. F.
1991 *Liberalism and the Quest for Islamic Identity in the Philippines*. North Carolina: The Acon Press.
ベリョー，W.
1991 フィリピン情報資料室訳『フィリピンと米国：LIC 戦略の実験場』連合出版。
Enloe, C. H.
1980 State-Building and Ethnic Structures: Dependence on International Capitalist Penetration, In T. K. Hopkins, and I. Wallerstein eds., *Processes of the World-System*. London: Sage, pp. 266-288.
Fianza M. L.
1994a Preliminary Notes on Some Aspects of the Moro Social Formation, *Mindanao Focus* 12(3): 4-21.
1994b Indigenous Patterns of Land Ownership and Use and the Effects of Public Policy Among the Moro People in Southern Philippines, *Mindanao Focus* 12(3): 22-46.
藤原　帰一
1984 「イデオロギーとしてのエスニシティー：米国統治下における『モロ問題』の展開」『国家学会雑誌』97(7-8): 508-529。
George, T. J. S.
1980 *Revolt in Mindanao: The Rise of Islam in Philippine Politics*. Kuala Lumpur: Oxford University Press.
Gowing, P. G.
1979 *Muslim Filipinos: Heritage and Horizon*. Quezon City: New Day Publishers.
Gowing, P. G. & McAmis, R. D., eds.
1974 *The Muslim Filipinos: Their History, Society and Contemporary Problems*. Manila: Solidaridad Publishing House.
川島　緑
1989-90 「フィリピンにおける国民統合体制の成立：1950年代ムスリム・エリートの役割を中心に」『アジア研究』36(1): 41-58。
1992 「南部フィリピンにおける公選制の導入：ムスリム社会の構造的変化をめぐって」『東南アジア―歴史と文化―』No. 21: 116-141。
1996 「『辺境』マイノリティの覚醒：フィリピン，イスラーム政党の挑戦」小杉泰編『イスラームに何がおきているか』平凡社，230-246。
Madale, N. T.
1984 The Future of the MNLF as a Separatist Movement in Southern Philippines. In Joo-Jock Lim, and S. Vani eds., *Armed Separatism in Southeast Asia*. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies, pp. 176-189.
Majul, A. C.
1985 *The Contemporary Muslim Movement in the Philippines*. Berkeley: Mizan Press.
Mercado, E. R.
1984 Culture, Economics and Revolt in Mindanao: The Origins of the MNLF and the

Politics of Moro Separatism. In Joo-Jock Lim, & S. Vani eds., *Armed Separatism in Southeast Asia*. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies, pp. 151-189.

Millan, S. F. ed.
Cotabato 1952 Guidebook: A Reference and Guide to Its Past, Peoples, Resources and Progress. Cotabato: Goodwill Press.

Noble, L. G.
1976 (Fall) The Moro National Liberation Front in the Philippines, *Pacific Affairs* 49(3): 405-424.

Pelzer, K. J.
1948 *Pioneer Settlement in the Asiatic Tropics: Studies in Land Utilization and Agricultural Colonization in Southeast Asia*. New York: American Geographical Society.

Rodil, B. R.
1987 Whose Ancestral Domain is Mindanao, Sulu and Palawan? *Moro Kurier* (*April-June*): 23-28.

鈴木静夫，早瀬晋三編，石井米雄監修
1992 『フィリピンの事典』同朋社。

Tadem, E. C., J. Reyes, & L. S. Magno
1984 *Showcase of Underdevelopment in Mindanao: Fishes, Forest and Fruits....* Davao City: Alternate Resource Center.

Tan, S. K.
1977 *The Filipino Muslim: Armed Struggle, 1990-1972*. Manila: Filipinas Foundation.

鶴見 良行
1984 『マングローブの沼地で：東南アジア島嶼文化論への誘い』朝日新聞社。
1986 「フィリピンの難民：ミンダナオ内戦を中心として」国連大学・創価大学アジア研究所共編『難民問題の学際的研究』お茶の水書房，63-93。

Turner, M., R. J. May, & L. R. Turner, eds.
1992 *Mindanao: Land of Unfulfilled Promise*. Quezon City: New Day Publishers.

Wernstedt, F. L. & Simkins, P. D.
1965 Migrations and the Settlement of Mindanao, *Journal of Asian Studies* 25(1): 83-102.

山影 進
1988 「フィリピン・ムスリムのナショナリティとエスニシティ」 平野健一郎ほか『アジアにおける国民統合』東京大学出版会，189-223。